

京都三都物語

— 恭仁宮・長岡京・平安京 —

講演

日本古代都城研究の展望 山田邦和

スライド報告

- | | | |
|-----------------|------|---------|
| 1. 恭仁宮の調査成果について | 奈良康正 | P 1～6 |
| 2. 長岡宮の調査成果について | 中島信親 | P 7～18 |
| 3. 長岡京の調査成果について | 岩松 保 | P 19～24 |
| 4. 平安京の調査成果について | 網 伸也 | P 25～32 |

日時：平成17年2月20日（日）

場所：長岡京市中央公民館 市民ホール

主催 京都府教育委員会
乙訓文化財事務連絡協議会
(長岡京市教育委員会・向日市教育委員会・大山崎町教育委員会
(財)長岡京市埋蔵文化財センター・(財)向日市埋蔵文化財センター)
(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

後援 (財)京都市埋蔵文化財研究所

日本古代都城研究の展望

花園大学 文学部
教授 山田 邦和

はじめに

◎「国営発掘」で日本古代都城の流れが語られる（飛鳥→藤原→平城）。難波宮、恭仁京、長岡京、平安京はどこにいった？→その他の都城の意義を考えたい。

1 日本古代都城の画期

◎ 大化元年（645）12月9日、難波長柄豊碓宮遷都（天皇遷御は白雉2年〈651〉12月、完成は同3年9月）。

◎ 難波長柄豊碓宮の構造：

○「其の宮殿の状、ことごとくに論ふべからず」（白雉3年9月紀）

○考古学上でいう「前期難波宮」＝孝徳朝難波宮＝難波長柄豊碓宮。

○宮の中核部は朝堂院＋内裏からなる。本格的な朝堂院を持つ初めての宮。兩者をつなぐ壮大な「内裏前殿」（後の大極殿に繋がる）の存在。朝堂院には12堂。内裏前殿の前面東西には八角殿院。巨大な内裏南門。

○建物は掘立柱建築で、瓦葺ではなく板葺。

○唐長安城中心部を日本風アレンジして模倣した（長安城皇城と大明宮のいいとこ取り）宮殿。八角殿院は長安城大明宮含元殿左右の楼閣の模倣。

○仏教思想によって染め上げた都＝「沙門惠隱を内裏に請せて、無量寿経を講かしむ」（白雉3年4月紀）、「天下の僧尼を内裏に請せて、設齋くをがみして大捨てて燈燃す」（同年12月紀）。

○白雉4年、皇太子中大兄皇子・皇極先帝・皇后間人皇女の「反乱」＝皇太子・文武百官ら「倭京」（倭飛鳥河邊〈かはらの〉行宮）へ遷る。取り残された孝徳天皇、退位を決意、「宮を山碓（京都府大山崎町か）に造らしめたまふ」（白雉4年是歳紀）。→白雉5年10月10日、孝徳天皇崩御。

2 異形の「水の都」

◎齊明朝の再検討

○中大兄（後の天智天皇）の傀儡でも、天智朝の前哨でもない独自の時代。齊明元年（655）重祚（於飛鳥板蓋宮）～同7年（661）崩御の6年間。

◎「齊明朝飛鳥京」の出現

○齊明元年10月13日、小墾田宮造営。「瓦葺に擬將とす」（同月紀）。同年冬、飛鳥板蓋宮火災、飛鳥川原宮に遷御。

○同2年、後飛鳥岡本宮造営、遷御（同年是歲紀）。多武峰（田身嶺）に周垣と兩槻宮（観<たかどの>、別名天宮<あまつみや>）造営。香具山～石上山に運河「狂心渠<たぶれこころのみぞ>」、宮の東山に石垣→世論の反発（同年是歲紀、齊明4年11月3日紀）。吉野宮造営。須弥山像造営（齊明3年7月15日、6年5月）。漏剋（齊明6年5月）。

○発掘調査＝出水の酒船石を持つ「飛鳥京苑池」。須弥山石、石人像などの奇怪な石像物。酒船石遺跡での巨大な石垣。酒船石遺跡の「亀形石」遺構。水落遺跡の漏剋遺構。

◎齊明朝飛鳥京の評価→オリジナルでユニークな都ではある。しかし、朝堂院を造ろうとした形跡はまるでない＝日本都城の王道からはまったくはずれた「異形かつ反動の都」。齊明7年7月24日天皇崩御、「朝倉山の上に鬼有て、大笠を着て、喪の儀を臨み視る」。

3 都城政策の混迷と定着

◎天智朝の近江大津宮（天智6年3月19日遷都）→孝徳朝難波タイプとする（林博通）とするか、齊明朝飛鳥タイプとする（林部均）とするかによって評価が変わる。

○天智朝の遷都計画→天智9年2月、「蒲生野の匱窪野<ひさの>に幸して、宮地を觀はす」。
→天智10年12月3日、天皇崩御により未完。

◎天武朝倭京（飛鳥浄御原宮）と複都制

○天武元年9月12日嶋宮→15日岡本宮。同年冬、飛鳥浄御原宮造営、2年2月27日即位。

○飛鳥浄御原宮：天武朝倭京の中核。内裏（内郭）の周囲に外郭、その南東にエビノコ郭（朝堂院相当建物群ではあるが、朝堂が郭内には存在せず。大極殿相当建物である正殿も、妻入側を正面とする異常な構造）→あくまで仮の都としか思えない。いずれは新京造営を計画。

○「新城」造営計画＝天武5年（677）是年、「新城<にいき>に都つくらむとす。限の内の田園は、公私を問はず、皆耕さずして悉くに荒れぬ。然れども遂に都つくらず」→しかし、なぜか未完。→その遺志は、皇后であった持統天皇が継承。新益京（藤原京）として完成。

○「複都制」の採用→天武8年（680）11月、難波に羅城を築く。12年（684）12月「凡そ都城・宮室、一処に非ず。必ず兩參造らむ。故、先ず難波に都つくらむと欲ふ。是を以て、百寮の者、各住りて家地を請はれ」。（13年（685）2月28日「是の日に、三野王・小錦下采

女臣筑羅等を信濃に遣して、地形を看しめたまふ。是の地に都つくらむとするか」→新都ではなく、西の大宰府に対応するような東国政庁計画か?)

○13年(685)2月28日「・・・畿内に遣して、都つくるべき地を視占しめたまふ。」→飛鳥にこだわらず、広く正都の地を求める。試行錯誤中、朱鳥元年(686)9月9日、天武天皇崩御。

4 壮大な双翼の都

◎恭仁京

○天平12年(740)9月3日、大宰少貳藤原広嗣の乱勃発。10月26日、聖武天皇東国巡幸詔「朕意へる有るに縁りて今月の末暫く関の東に往かむ。其の時に非ずと雖も事已むことを得ず。將軍之を知るとも驚恠す須からず」=聖武の「彷徨5年」の開始。=壬申の乱の大海人皇子(天武天皇)の行動を迫体験(瀧浪貞子)。

○恭仁京遷都=天平12年(740)12月6日「右大臣橘宿禰諸兄前に在りて発して山背国相楽郡恭仁郷を經略す。遷都を擬するを以ちての故なり」、同15日「皇帝前に在りて恭仁の宮に幸し、始めて京都を作らしむ」、13年(741)正月1日「天皇、始めて恭仁の宮に御して朝を受け給う。宮垣未だ就らず、繞らずに帷帳を以てす」。8月28日「平城の二市を恭仁京に遷す」。9月8日造宮卿補任。同12日「京都の百姓に宅地を班ち給はしむ。賀世山の西道より以東を左京と為し以西を右京と為す」。11月11日「天皇勅して曰はく、号を大養徳<やまと>の恭仁の大宮と為さむ、と」。14年(742)正月1日、大極殿未完成。同7日「天皇、城北の苑に幸して五位已上を宴す」。天平15年(743)12月26日「初めて平城の大極殿並に歩廊を壊ちて恭仁宮に遷し造ること茲に四年」。

→恭仁宮には平城宮の大極殿が移築されていた(この段階で大極殿を備えた宮は恭仁宮と難波宮。平城宮には大極殿存在せず)=平城京は形式上も實質上も廃都。

○恭仁京は左右京・市・大極殿を備えた正都。ただし、突貫工事のためかコンパクトな宮となった。

○恭仁京のモデル=唐の副都洛陽説(瀧川政次郎)。

○恭仁京の混迷=天平15年(743)12月24日、恭仁宮造作停止。天平16年(744)閏正月1日、百官に「恭仁・難波の二京、何れを定めて都と為む。各其の志を言え」、同4日「市に就きて定京の事を問はしむ」→日本最初の「世論調査」、恭仁京支持：五位以上24人、6位以下157人、市人はほとんど。難波京支持：五位以上23人、6位以下130人、市人1人。平城京支持：市人1人。

◎紫香樂宮と大仏の造営

○天平14年(742)2月5日「恭仁京の東北の道を開き、近江国甲賀郡に通はす」。同年8

月 11 日、造紫香樂離宮司任命。紫香樂宮行幸：8 月 27 日～9 月 4 日、12 月 29 日～天平 15 年正月 2 日、4 月 4 日～16 日、7 月 26 日～11 月 2 日。天平 15 年（743）10 月 15 日「大仏建立の詔」発布。17 年正月元旦、紫香樂宮の垣は未完成「繞らずに帷帳を以てす」、ただし、宮に「大きな榊（たてほこ）を樹て令む」←これをもって「紫香樂宮の正都化」とする向きもあるが、正しくない。元旦にあたり、天皇の所在を明示したと解すべし。

◎聖武朝難波宮

○聖武朝難波宮（後期難波宮）の造営＝神亀 3 年（726）10 月 26 日、藤原宇合、知造難波宮事に任命。神亀 4 年（725）2 月 9 日、難波宮造営。天平 6 年（734）9 月 13 日、難波京に宅地班給。→恭仁京遷都の十数年以前より、難波宮は「副都」として造営されていた。大極殿・朝堂院を完備した「完璧な宮」として最初から造営（ただし、朝堂は 12 堂ではなく 8 堂）。

○難波宮の正都化＝天平 16 年 2 月 1 日、恭仁宮の馱鈴・内外の印を難波宮に移し、諸司・朝集使等を難波宮に召す。同 20 日、恭仁宮の高御座・大盾・兵庫の器仗を難波宮に移す。同 21 日、恭仁京の百姓のうち、難波宮に移住希望者は無条件で許可。同 24 日、天皇は三島路をとって紫香樂宮行幸、難波宮には元正上皇・左大臣橘諸兄が滞在。同 26 日、「左大臣勅を宣りて云はく、今難波宮を以て定めて皇都と為す。宜しく此の状を知りて京戸の百姓意の任に往来すべし」＝難波宮遷都、ただし天皇は紫香樂宮滞在。

◎平城京への遷都

○紫香樂宮崩壊へ＝天平 16 年 3 月 13 日、17 年 4 月 1 日、同 3 日、同 11 日、17 年 5 月 9 日頃、紫香樂宮周辺の山に火災。17 年 4 月～9 月、地震頻発。5 月 11 日、「甲賀宮空しくして人無く、盜賊充斥して火も未だ滅えず。仍りて諸司及び衛門衛士等を遣して官物を収め令む」。

○難波宮と平城京のせめぎ合い＝天平 17 年 5 月 2 日、諸司の官人に「問ひていはく、何れの処を以てか京と為さむ、と。皆言さく、平城に都すべし、と」。同 4 日、平城京の四大寺の衆僧に同様の調査、全員、平城京遷都を主張。5 月 5 日、天皇、紫香樂宮から恭仁宮へ出発、翌日恭仁還御。5 月 10 日、恭仁京の市人が平城京に移る。5 月 11 日天皇平城京行幸。この頃、平城京東郊に大仏造立開始（後の東大寺）。8 月 28 日難波宮行幸、9 月 19 日天皇の不予により平城・恭仁の留守官に宮中を守らせ、皇族を難波宮に招集し、平城宮の鈴・印を難波宮に移す。→聖武天皇は最後まで正都難波宮にこだわり、平城京は大仏のある「仏都」としようとしていたが、天変地異、自らの健康悪化などによってついに力尽きる。

○天平 17 年 9 月 25～26 日、天皇、平城宮に還御。12 月 15 日、恭仁宮の兵器を平城に運ぶ。
＝事実上の平城京遷都。

◎聖武天皇の「彷徨 5 年」の意義

○偉大な祖としての天武天皇の模倣＝東国巡幸、難波宮の再建、複都制の採用。

○天皇の計画→平城京は廃都。将来的な正都かつ当面の副都は難波宮。暫定正都および将来

的な副都は恭仁京。大仏の聖地（唐洛陽の龍門石窟がモデル）＝「仏都」としての紫香樂宮。

←図らずも、正都恭仁京を中心として、西には木津川・淀川で結ばれた副都難波宮、東には街道で結ばれた仏都紫香樂宮という、「両翼の都」が現出。

○聖武天皇は、都城の条坊制には必ずしもこだわっていない←唐長安の条坊制の「呪縛」に規制された東アジアの都城としては「異端」の都。

○平城京遷都は、3都制の挫折と単都制の固定化→この後、難波宮は建物が維持されていくだけで、「副都」の実質は喪失。

5 古代都城史の革命

◎桓武天皇：自らを唐の2代皇帝太宗のような「新王朝の始祖」と考えていた。新しい王朝には新しい首都を求める。

◎長岡京の改造

○前期長岡京（延暦3年11月12日～延暦8年2月27日）：朝堂院（初名は太政官院）は後期（聖武朝）難波宮の移建によって建設（双方ともに朝堂8堂、速やかな建設を実現させるため）。朝堂は8堂、朝集殿院はなし。朝堂院南門（平安宮の会昌門）が朱雀門を兼ねるという特異な設計。延暦4年（785）9月23日、造長岡宮使藤原種継暗殺事件。同5年7月19日、朝堂院＝太政官院完成。

○後期長岡京（延暦8年2月27日～延暦12年1月21日）：同日、「西宮より移りて、始めて東宮に御す」＝内裏の移建（第1次内裏から第2次内裏〈朝堂院の東方〉への移動）。宮城の南側への拡大（宮城前面の16町が宮城に取り込まれる）。朝集殿院・「豊楽院」新設？。

○末期長岡京（延暦12年1月21日～同13年10月22日）：同日、桓武天皇、東院へ移御。

6 古代都城の完成

◎平安京遷都：延暦13年10月22日、桓武天皇移御。10月28日、正式の遷都（遷都の詔）。

◎桓武天皇が込めた理想：新しい京「平安京」と名付ける。山背国→山城国改名。近江国古津を大津と復称（天智天皇の正統であることを標榜）。

◎京の単位ブロックは全て40丈（約120m）四方の正方形。東寺・西寺、東市・西市、等の左右対称。←都城の理想主義の極地。

◎長岡京に比べ、「北辺」坊を付け加える（＝宮城の拡大）。←「北辺」拡大は平安京初期。

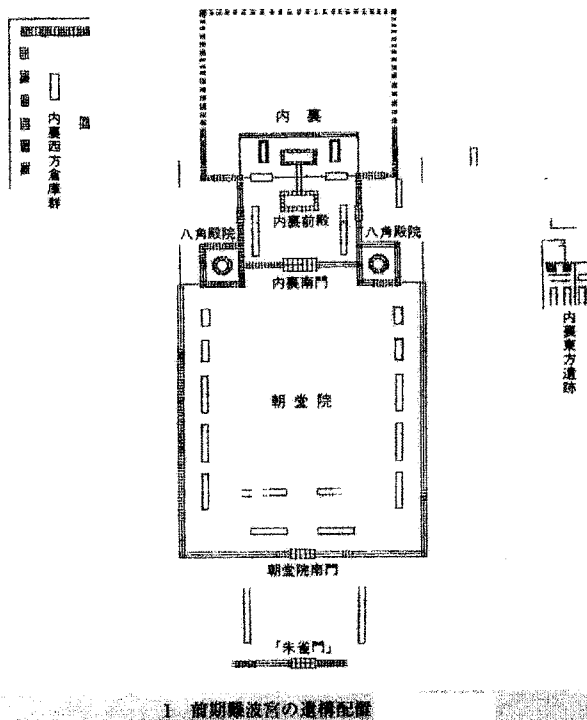


図1 前期難波宮（孝徳朝難波長柄豊碕宮）

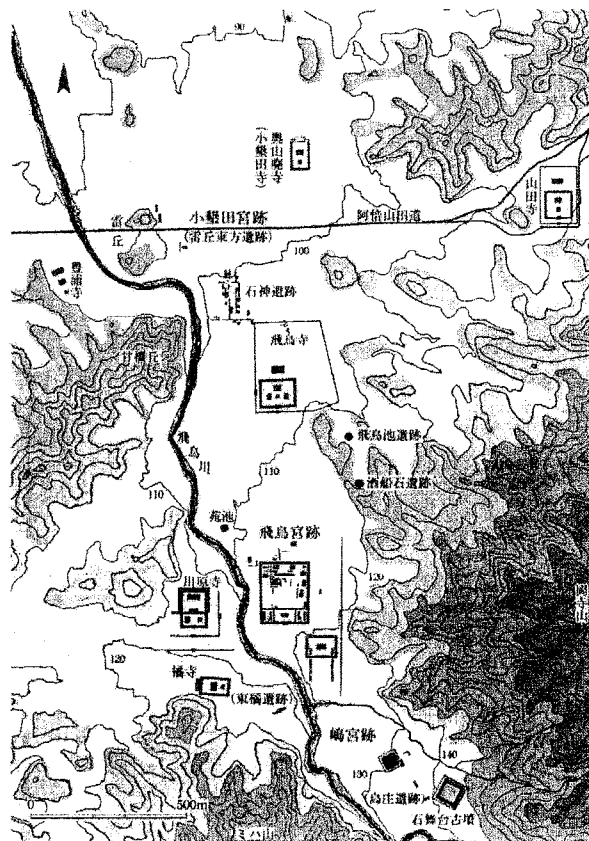


図2 倭京（斉明・天武朝飛鳥京）

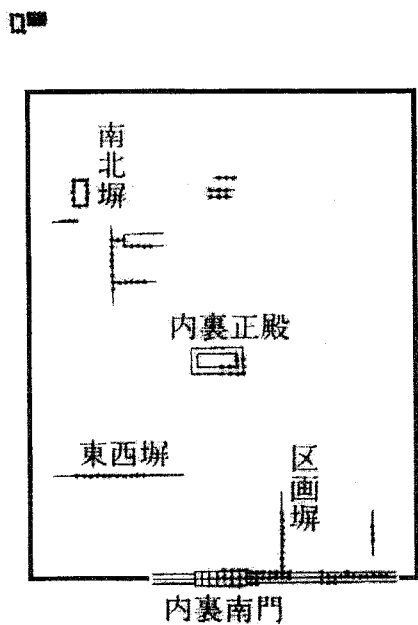


図3 近江大津宮（林部均案）

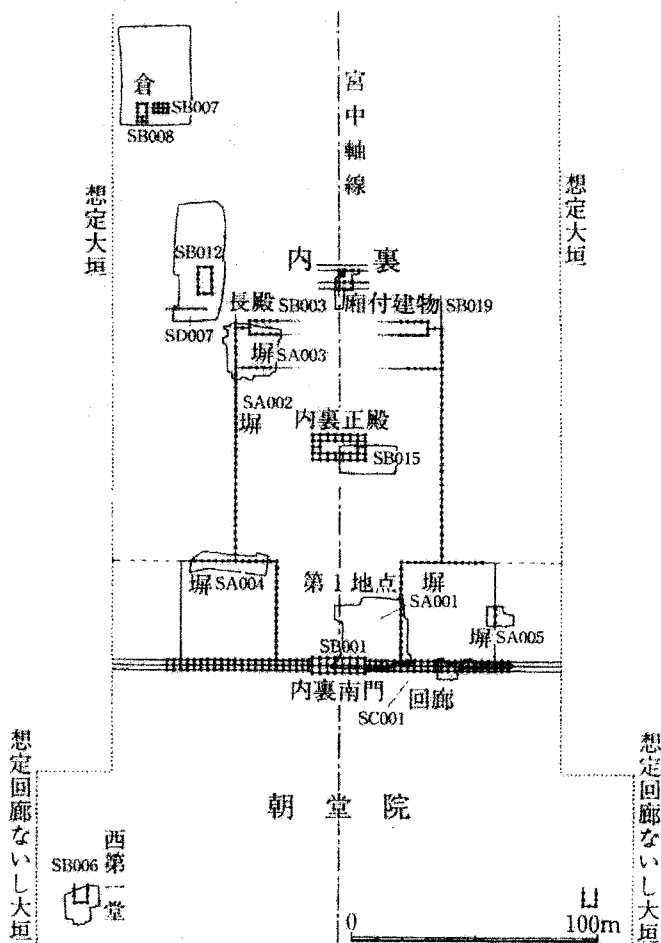


図4 近江大津宮（林博通案）

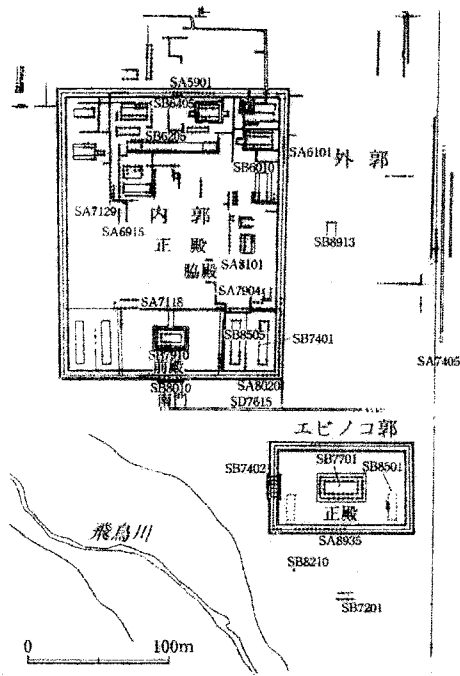
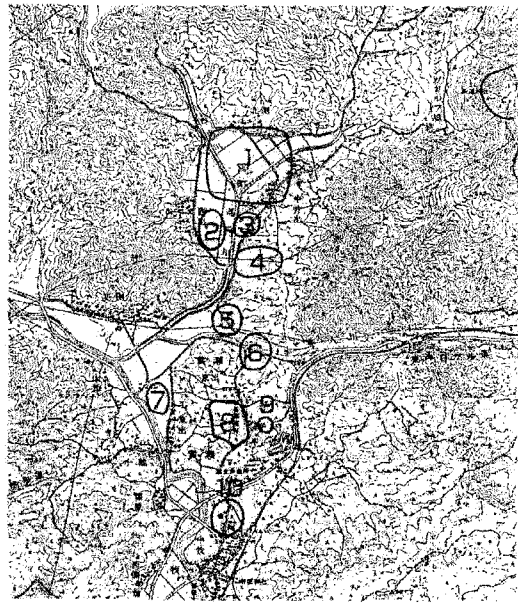


図5 天武朝飛鳥浄御原宮



- | | |
|-----------|------------|
| 1. 宮町遺跡 | 2. 西出遺跡 |
| 3. 中井出西遺跡 | 4. 沢谷遺跡 |
| 5. 新宮神社遺跡 | 6. 鍛冶屋敷遺跡 |
| 7. 東出西遺跡 | 8. 史跡紫香樂宮跡 |
| 9. 東出遺跡 | 10. 雲井遺跡 |

宮町遺跡周辺の遺跡分布図 (1:75000)

図6 紫香樂宮

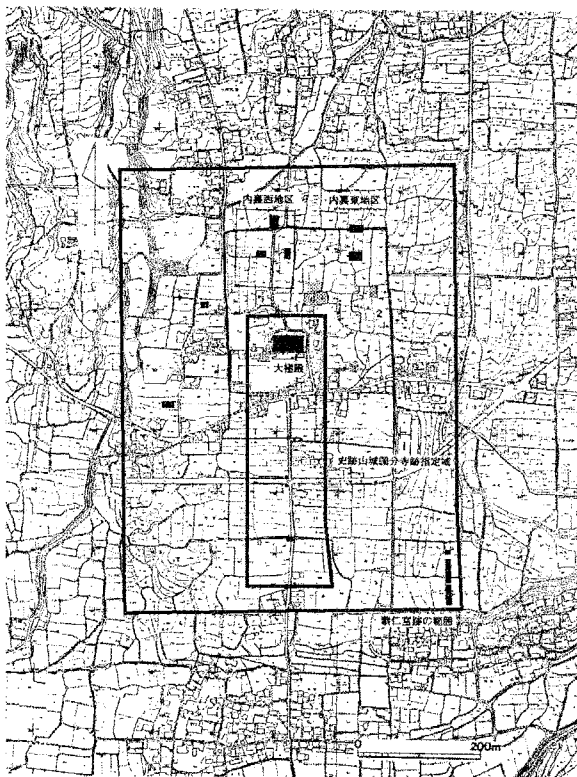


図7 恭仁宮

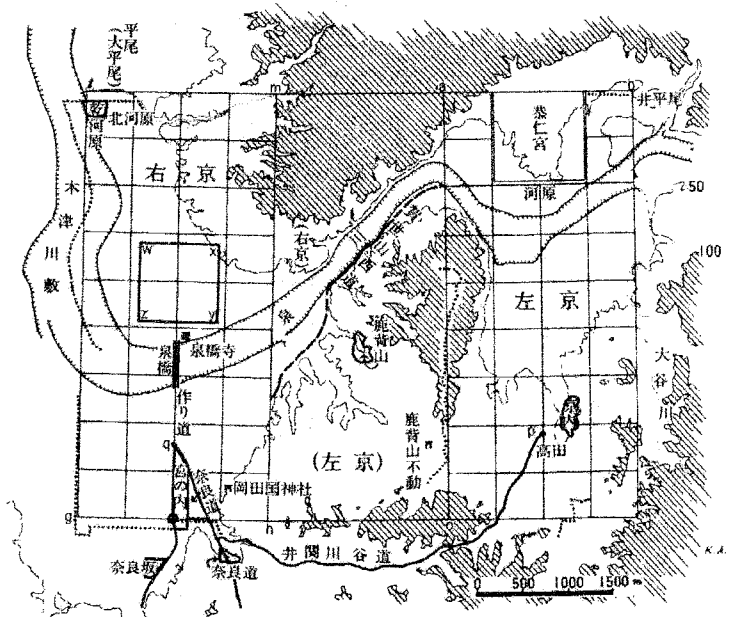


図8 恭仁京 (足利健亮案)

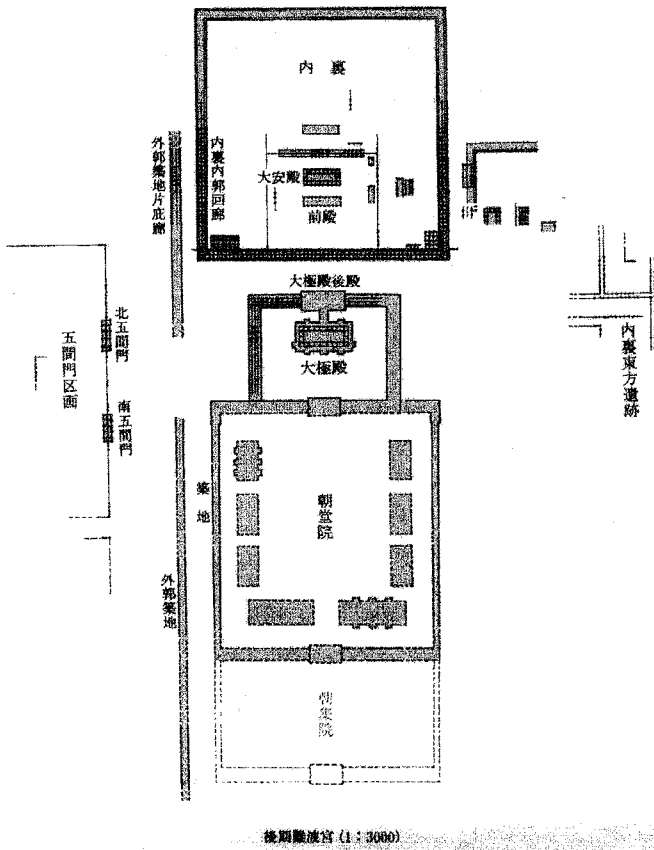


図9 後期難波宮（聖武朝難波宮）

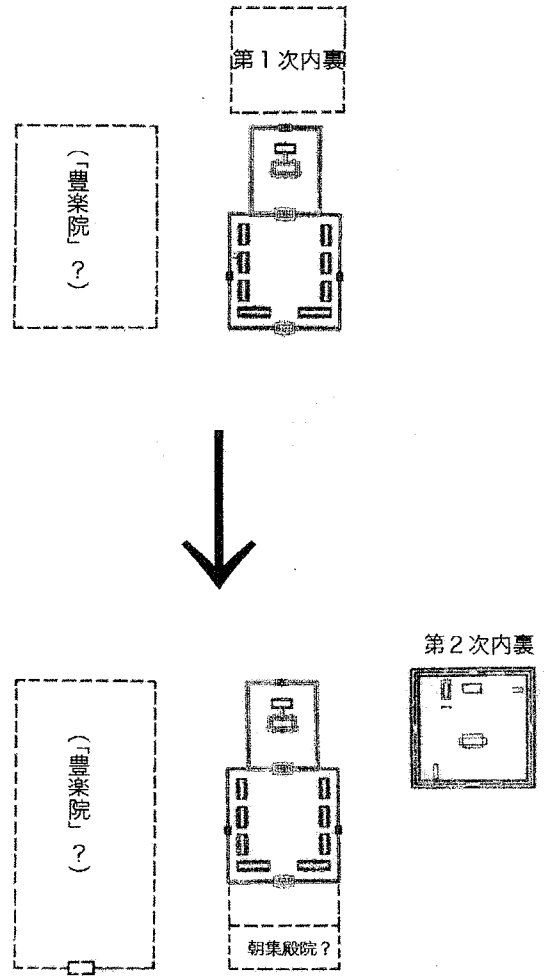


図10 長岡宮の変遷

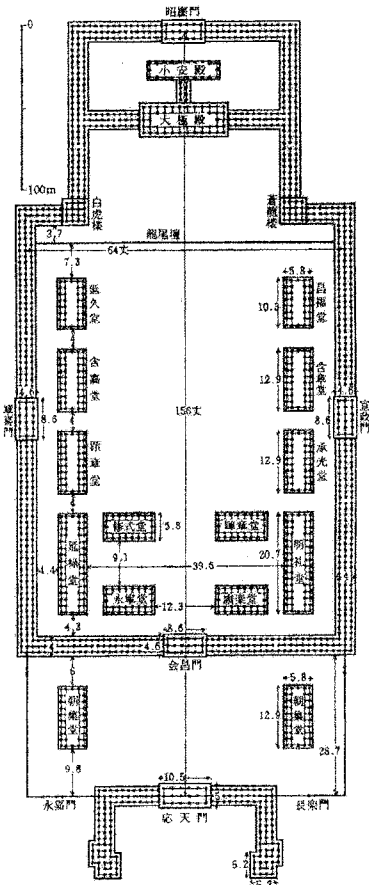


図12 平安宮朝堂院

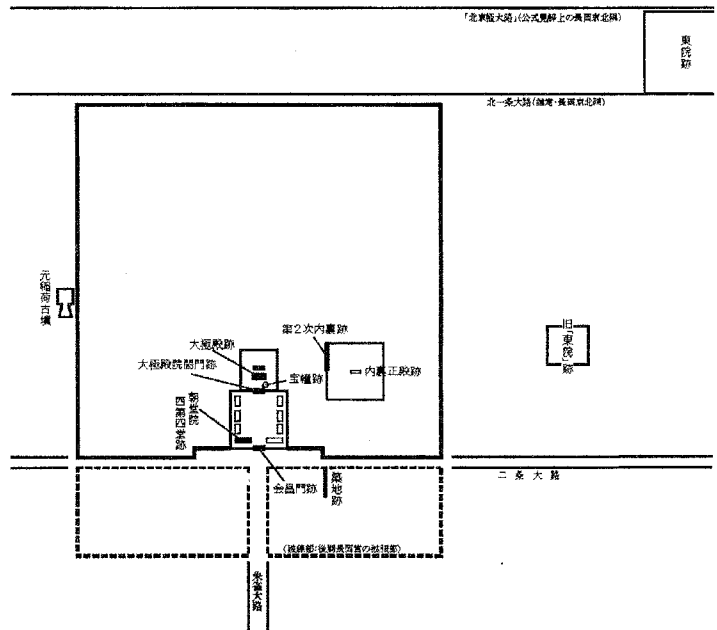


図11 長岡宮

恭仁宮の調査成果について

京都府教育委員会
技師 奈良 康正

1 はじめに

恭仁宮は、かつて瓶原みかのはらと呼ばれた現在の相楽郡加茂町字例幣れいへいを中心とする地に営まれた奈良時代の都「恭仁京」の宮域です。しかし、恭仁京については手がかりが少なく、その実像は不明です。宮が造られた場所は、現在でも三方を山に囲まれ、南には木津川の流れを望む美しい田園風景が広がっています。

古代の日本においては、奈良や京都を中心に国の首都となる都城が造営されました。最初に造られた本格的な都城は、中国の都を参考にして造営された藤原京ふじわらきょうです。天武天皇てんむによって計画され、天武天皇の死後に遺志を引き継いだ持統天皇の手によって持統8（694）年に完成されました。その後、元明天皇により平城京の造営が行われ、和銅3（710）年に都が遷されました。それから30年後の天平12（740）年になると、聖武天皇しょうむが新しい都の造営を始めます。これが恭仁宮（京）です。しかし、天平14（742）年になると紫香樂宮しがらきのみやの造営が開始されたために恭仁宮の造営は、天平15（743）年には停止されてしまいました。さらに天平16（744）年には難波宮なにわのみやが都とされ、そして天平17（745）年には再び平城京へと都は還っていきました。その後、恭仁宮は山背国分寺となりました。

恭仁宮に都が置かれたのは、天平12年から同16年までの足かけ5年のことでした。

2 恭仁宮跡での発掘調査

恭仁宮跡での調査は、京都府教育委員会が昭和48年度から行っています。初年度は分布及び文献調査を実施し、昭和49年度から現地での発掘調査を継続して行っています。そして、昭和61年度からは加茂町教育委員会も発掘調査に携わっています。これまでに実施した33年に及ぶ発掘調査の成果により、おぼろげながら恭仁宮の実像が浮かび上がってきました。

恭仁宮（京）を考える時には、地名や地形そして古道の痕跡などを参考にした歴史地理学の研究の果たした役割はとて大きく、中でも足利健亮さんの数

々の研究がその指針となりました。足利さんは、加茂町立恭仁小学校北の土壇を大極殿跡と考え、その北に内裏、その南に朝堂院を想定し宮域を地理的状況と平城宮を参考にして1km四方の大きさと考え、京域は鹿背山を間に挟んで左京と右京が分割された平城京と同じ大きさとしました。恭仁宮跡の発掘調査はこうした学説を踏まえて開始されました。

宮の大きさは、周りを取り囲む大垣おおがきの痕跡が見つかったことにより判明しました。東面大垣は北東隅と南東隅で大垣の基底部や側溝が見つかりました。また、南寄りの地点では宮城門きゅうじょうもんの一つである東面南門はつきやくもんが見つかりました。南北7.2m×東西4.2m（三間×二間）の大きさと、八脚門と呼ばれる造りでした。さらに東面大垣は南端でわずかに東側へ張り出すことも分かりました。西面大垣は南西隅でその基壇が見つかりました。南面大垣は、南西隅の調査で大垣の基壇が見つかりました。基壇の下の幅は9mで、上の幅も6mと大きく、高さは1.2mに復原できました。そしてその南側には石垣が積まれていました。中央付近でも大垣に伴う南北の側溝が見つかり、その調査時に宮南面（二条）大路の側溝も見つかりました。北面大垣は、中央付近で大垣の基壇である版築はんちくによって固く叩き締められた盛土と、幅3m程を測る南北の側溝が見つかり、見つかりました。以上の調査成果から宮域の大きさは南北約750m×東西約560mの長方形に復原することができましたが、これは平城宮の半分にも満たない広さでした。

大極殿院地区だいくでんいんちくの中心には色々な儀式を行った大極殿が造られ、周りをおおがきで囲んでいたと考えられます。この地区には、現在も東西約53m×南北約28mの土壇が残っており、これが大極殿の基壇と考えられました。発掘調査により、この上に約45m×約20m（九間×四間）の建物が造られていたことが確認されました。その後の平城宮跡の調査によって、第一次大極殿と同じ建物であることがわかり、『続日本紀』しよくにほんぎに「・・・平城の大極殿と歩廊を壊して恭仁宮に遷し造る・・・」と記されたとおりに移築されていたことも証明されました。この他には大極殿院回廊を造る時に組んだ作業用足場と考えられる柱穴列なども見つかりました。

政治や儀式が行われた朝堂院地区ちょうどういんちくでは、これまでの調査により周囲を掘立柱塼ほったてばしらべいで囲んでいたことがわかりました。しかし、南端に朝堂院南門が造られていたこと以外は朝堂等の建物跡は見つかっておらず、どんな建物が造られていたのか分かっていません。朝集殿院地区ちょうしゅうでんいんちくも、朝堂院地区と同様に掘立柱塼で囲まれていたことがわかっていますが、建物跡は見つかっていません。

天皇が暮らすとともに儀式も行われた内裏だいりが想定される大極殿の北側には、東西に並んだ二つの区画があることが分かっています。これは、恭仁宮だけに見られる独特な構造です。この二つの区画についてはその性格がはっきりと分

かっていないため、それぞれ「内裏西地区」・「内裏東地区」と呼んで区別しています。「内裏西地区」では、中央付近で東西方向の建物が見つっています。その東隣りと北側には南北方向の建物が建てられていました。いずれの建物にも庇が造られていました。しかし、この三棟以外にどんな建物が造られていたのかは分かっていません。また、この区画は周り全てが掘立柱塀で囲まれ、東西が約98m、南北が約127mの広さでした。一方の「内裏東地区」は、これまでの調査で、中心付近に東西方向の建物が南北に2棟並んでいることが分っています。こちらの建物も庇が造られており、特に中心に造られた建物は四方に庇が造られていました。しかし、その他にはどんな建物が造られていたのかは分かっていません。こちらの区画は「内裏西地区」とは異なり、東・西・南側の三方が築地塀、北側のみが掘立柱塀で囲まれていました。さらに、東西が約110m、南北が約139mと「内裏西地区」より一回りほど広いことも分かりました。

京域については、これまでの発掘調査によって宅地や条坊の痕跡が見つっていないため、どこまで造られていたのかは分かりません。

3 おわりに

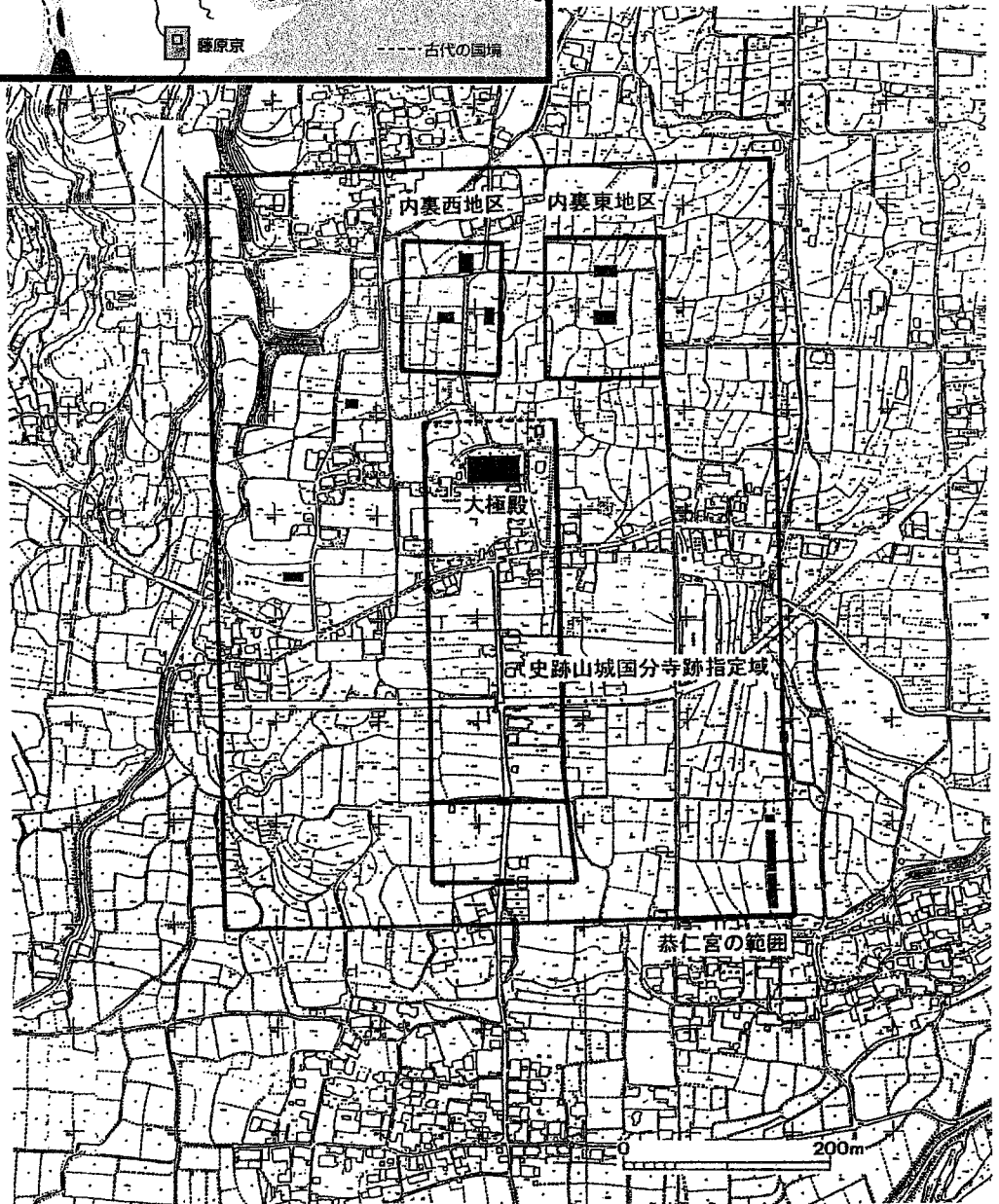
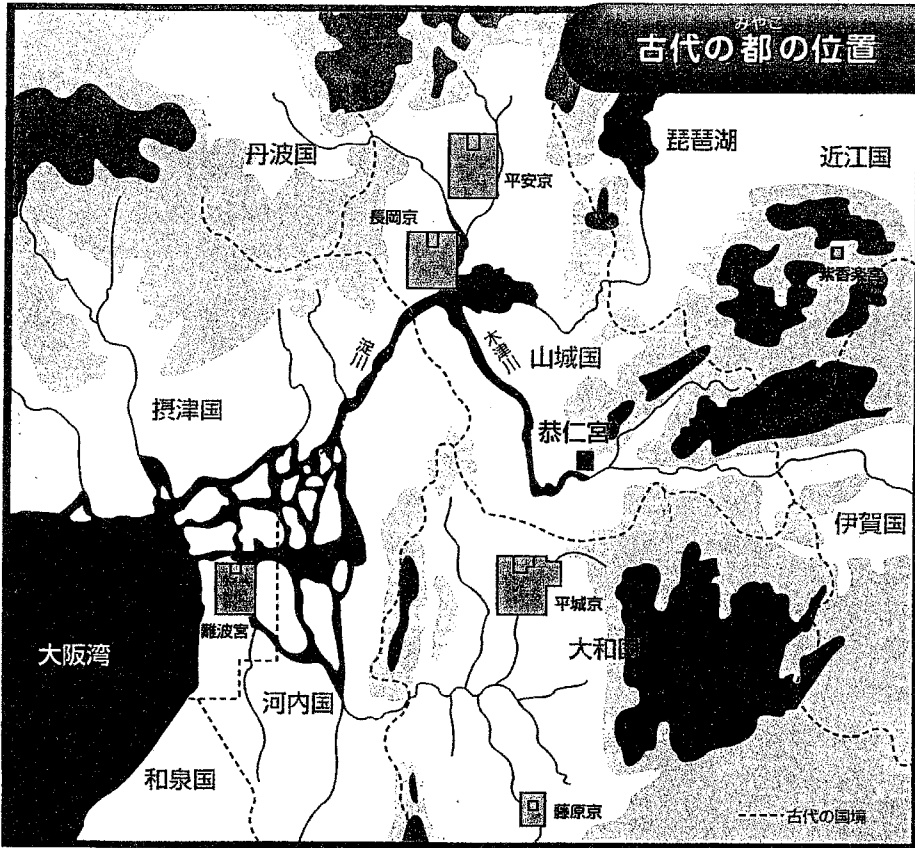
かつて恭仁宮は、木津川北岸の加茂町瓶原とする考えや、木津川南岸の加茂町法華寺野とする考え、さらには木津町木津にあったとする考えなど、その所在地についても様々な考えがありました。

しかし、足利さんの想定に基づいて開始された発掘調査により、瓶原を中心とする地域に恭仁宮の存在が確認されました。これまでに実施された発掘調査は、宮域を中心とした全体のわずかな面積に過ぎませんが、その実体も先に記したように徐々に分かってきています。現在では、宮の中心でありその後国分寺となった部分は、加茂町の努力により公有化が進み、一部が史跡公園になっています。その周辺は水田へとその姿を変えています。地中には今でも確かに恭仁宮が眠り続けているのです。

突然の遷都決定によりあわただしく造営に着手したためか、紫香楽宮の造営が始められたことにより工事期間が短くなってしまったためなのか、施工の歪み等もいくつか確認されています。さらに、内裏と考えられる区画が二つ造られた理由やそれぞれの性格、朝堂院・朝集殿院に造られていた建物、そして京域がどの程度まで造られていたのか等、不明な点もまだまだあります。

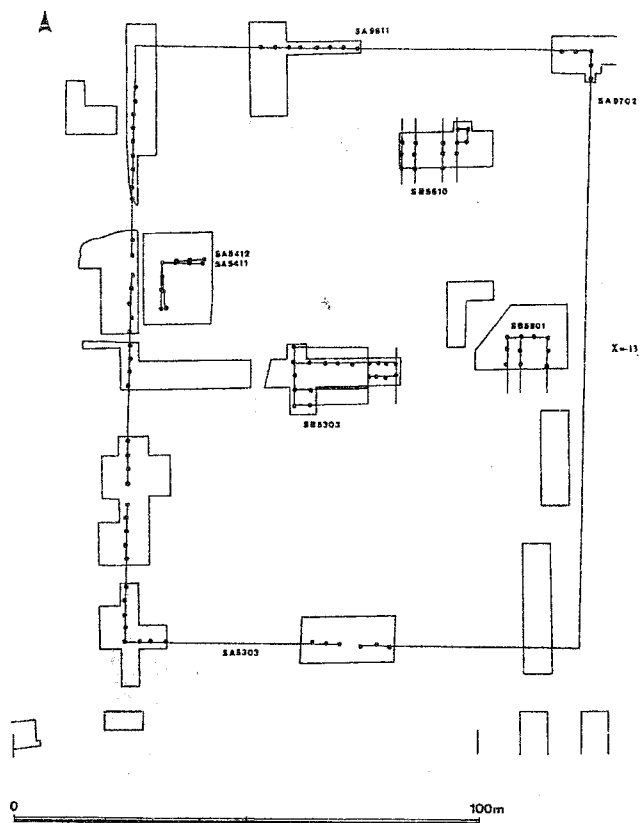
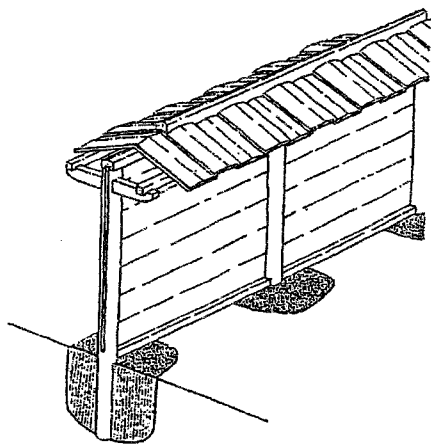
今後も発掘調査をとおして、保存・活用を行う上で必要な基礎資料を得る作業を続けるとともに、この貴重な文化財を保護し次代へと引き継いでゆく努力が必要です。

古代の都の位置



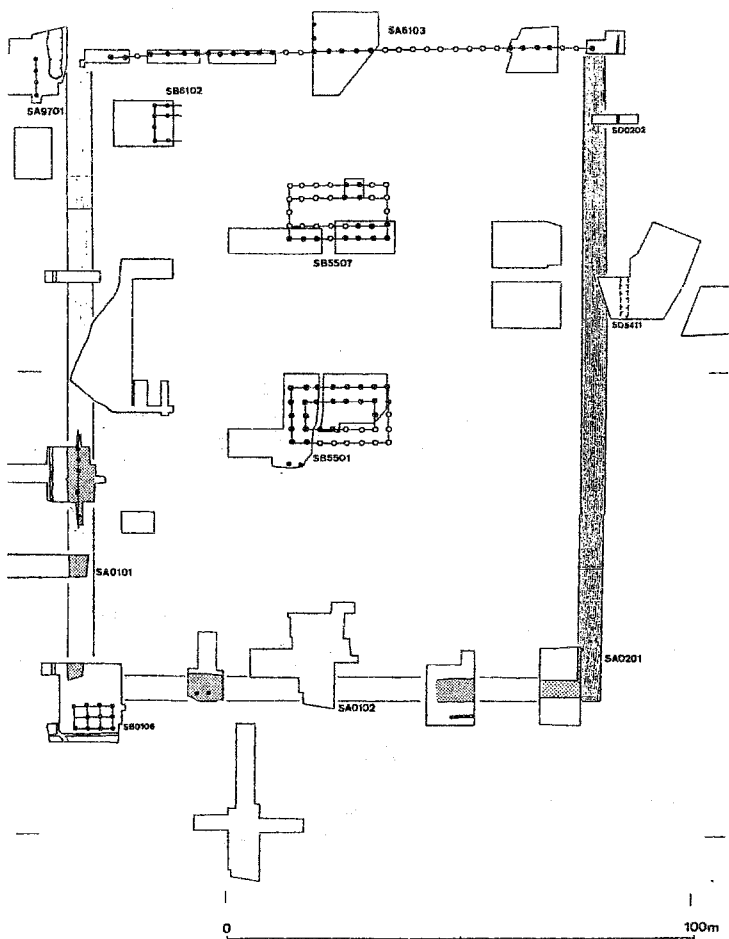
「内裏西地区」

掘立柱塀

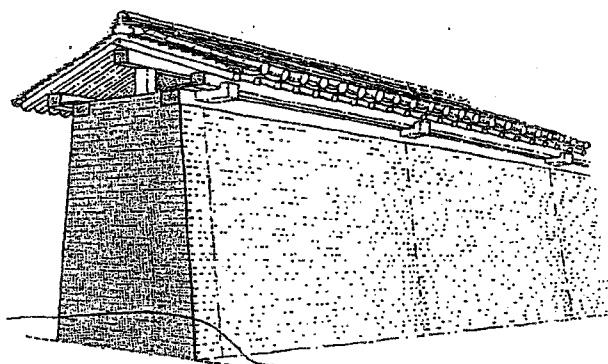


「内裏東地区」

A



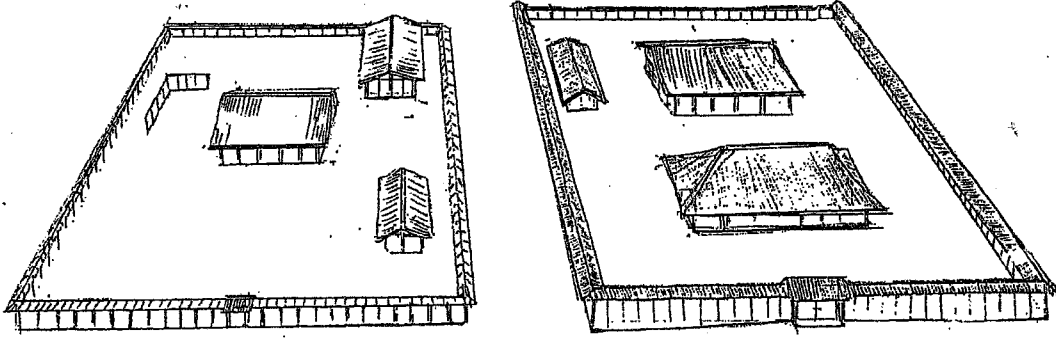
築地塀



宮大垣

「内裏西地区」

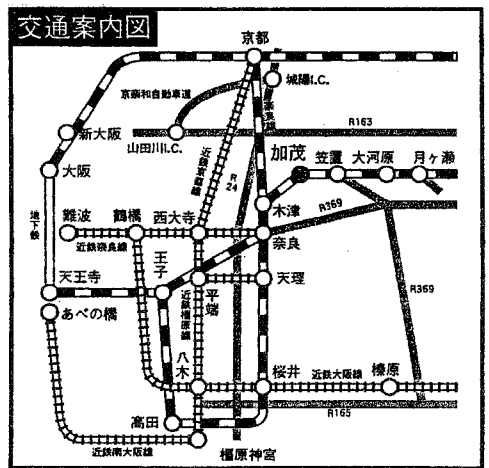
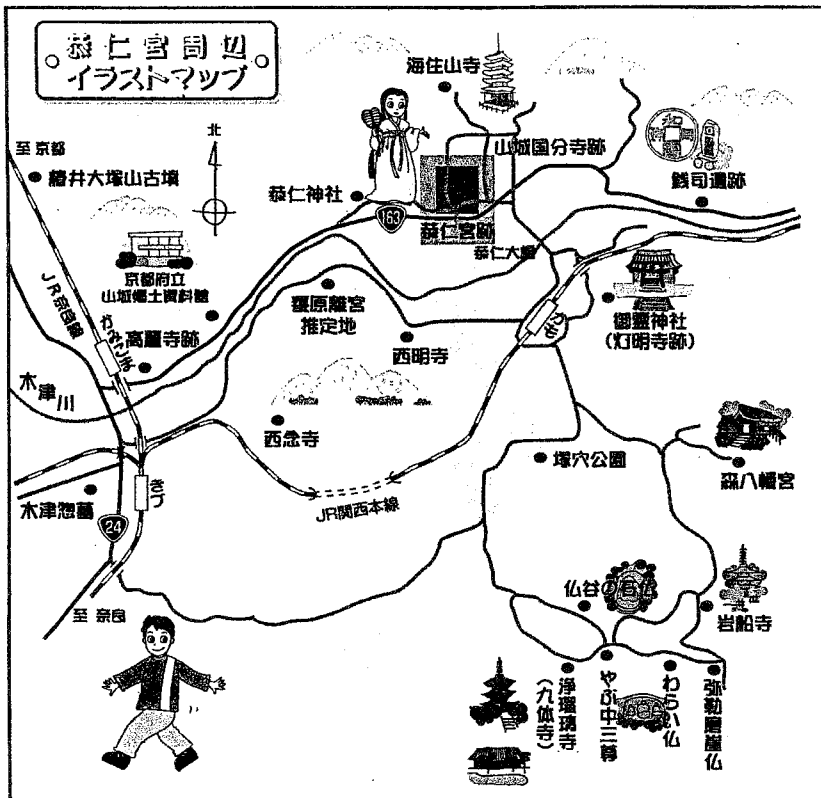
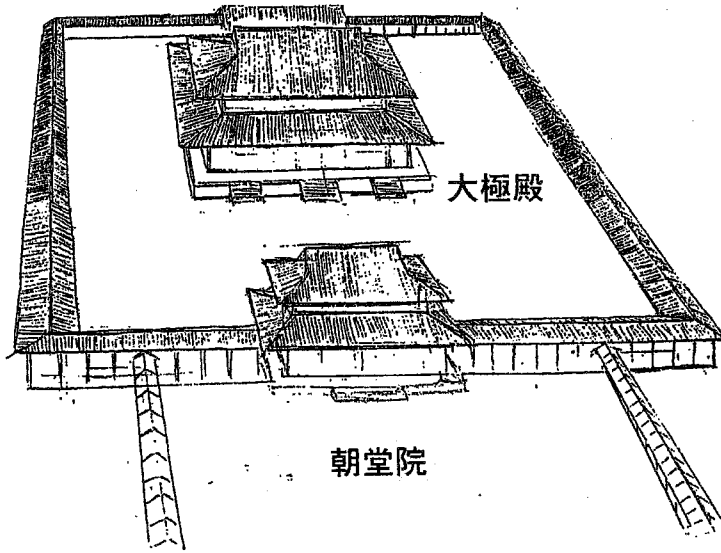
「内裏東地区」



大極殿院

大極殿

朝堂院



交通案内

京都駅 → JR奈良線 (快速38分) → 木津駅 → JR関西本線 (普通6分) → 加茂駅 → 徒歩 (20分) → 藤仁宮跡

京都市 → 国道24号 (31km) 上狛四丁目 (山城町) → 国道163号 (7km) → 加茂町

長岡宮の調査成果について

(財) 向日市埋蔵文化財センター
技 師 中島 信親

1 大極殿・大極殿院

- わかったこと
- ・難波宮の大極殿を移設したこと
 - ・後殿（小安殿）が回廊から分離、回廊には北門が設置される→内裏の分離と一体
 - ・宝幢遺構の確認→元日朝賀においても宝幢を立てたことを確認
- わからないこと
- ・北門の設置時期→第一次・第二次内裏移動説の解答となる
 - ・大極殿に取り付く回廊の存否→平安宮大極殿との対比

2 朝堂院（太政官院）

- わかったこと
- ・十二堂ではなく八堂形式
 - ・難波宮の朝堂院を移設したこと
 - ・西第四堂の規模が10間であったこと
- わからないこと
- ・西第四堂の階段の位置
 - ・南面回廊の構造→現在調査中

3 第二次内裏

- わかったこと
- ・大極殿院、朝堂院と分離して東側に位置すること
 - ・平安宮内裏とよく似た建物配置をすること→後期平城宮とも類似
 - ・平城宮の軒瓦が多く出土すること→平城宮の資材を主に再利用した
- わからないこと
- ・「西宮」はどこに？→位置、構造、難波宮から移設？

4 宮内官衙

- わかったこと
- ・京内条坊が延長され、京内と同じ土地区画制度によって区画されていたこと
- わからないこと
- ・宮内官衙の構造（建物配置）や名称

5 宮城の四至と宮城門

- わかったこと
- ・「北京極大路」は小路幅で設置された
 - ・「北一条大路」と「宮内朱雀大路」の交差点には門が確認できなかった
 - ・朝堂院のすぐ南を通過する「二条大路」路面上に門が開く
 - ・確認できた宮城門は「東面北第一門」のみ→規模が平城宮の宮城門より小規模、平安宮「上東門」に相当？

- わからないこと
- ・北限と南限が確定できず
 - ・北限—最も可能性が高い道路は「北一条大路」？→宮城門が見つからないことから決め手に欠ける
 - ・南限—宮南面での二条大路の位置→宮南面拡張説（山中説）。しかし前後2時期の遺構を確認する例は少ない。

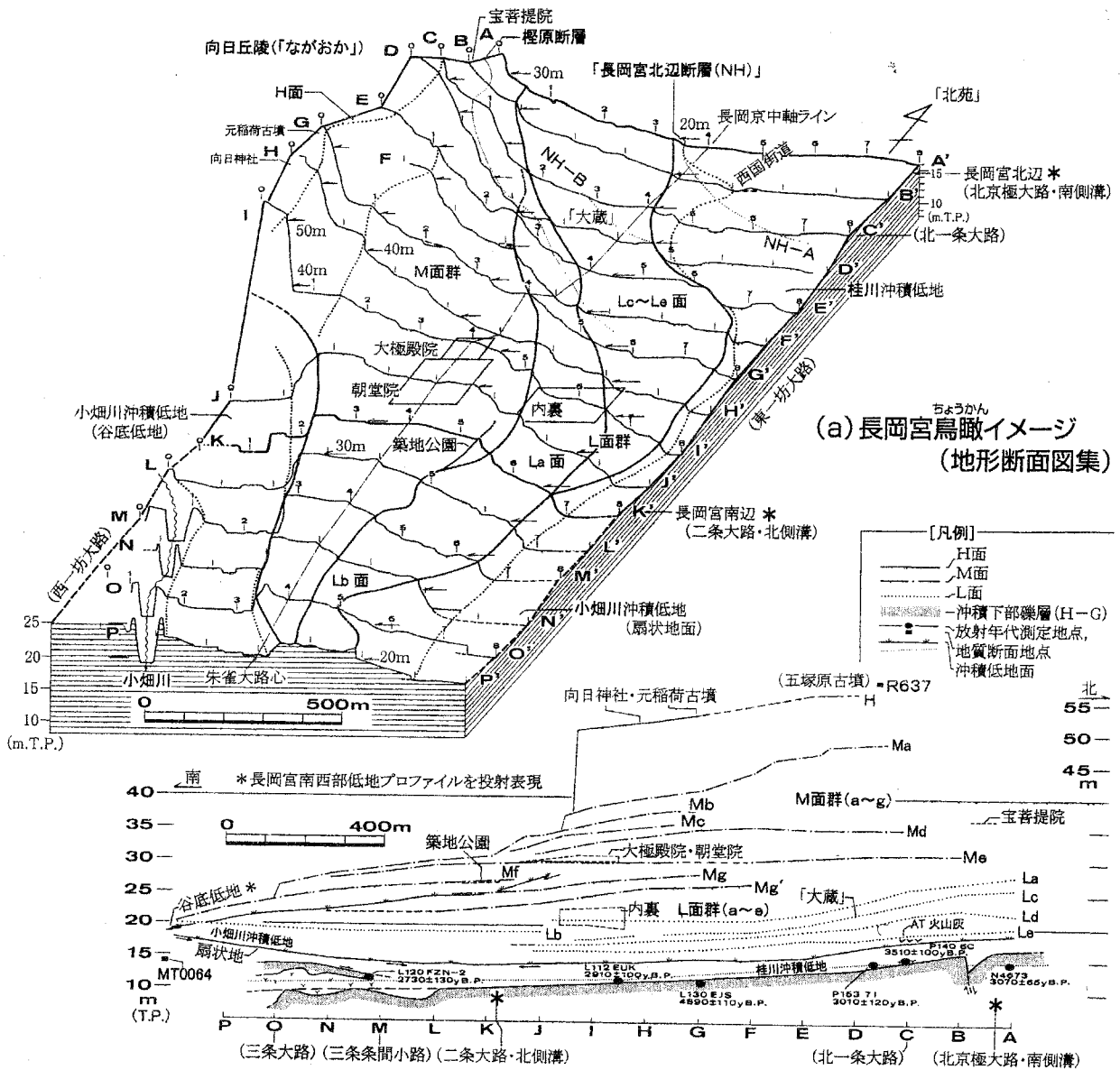
6 離宮（「北苑」・物集女車塚周辺遺跡・東院・左京二条二坊十町（旧東院）・左京二条二坊五・六・十一・十二町（猪隈院）と京内官衙

- わかったこと
- ・宮北郊や京内の左京二条以北、東二坊以西に離宮を配置する→平城宮では宮内（称徳天皇の東院、光仁天皇の楊梅宮など）か京外（宮北郊の松林宮など）に配置。
 - ・内郭構造（施設内を二重に区画して、その内部に主殿などの中枢建物を対称位置に配置する）の建物群
 - ・「旨」の異体字を瓦当に陽刻した軒瓦を主体的に用いる
 - ・現業的官司が京内の宮城周辺に配置される→平安京の「諸司厨町」の原形

- わからないこと
- ・離宮の構造
 - ・機能や名称

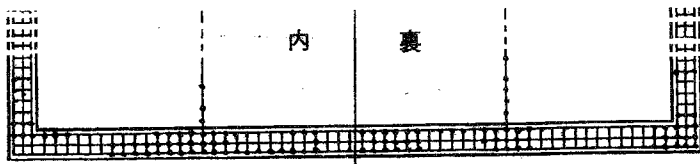
【図出典・参考文献】

- 梅本康広他「長岡京跡左京北一条三坊二町」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第55集 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2002年
- 梅本康広他「長岡宮跡第316次調査」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第66集 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2005年にて報告予定
- 小澤 毅「宮城の内側」『考古学による日本歴史』5 雄山閣出版1996年
- 國下多美樹・中塚 良「長岡宮の地形と造営～丘と水の都～」『(財)向日市埋蔵文化財センター年報 都城』14 2003年
- 寺升初代「平安宮の復元」『平安京提要』(財)古代学協会・古代学研究所編 1994年
- 中尾芳治「後期難波宮大極殿院の規模と構造について」『難波宮址の研究』第十 (財)大阪市文化財協会 1995年
- 中島信親「長岡京石左京第381次(7ANEMD-2地区)～二条条間南小路、左京二条に坊五・六町～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第65集(第1分冊) 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2005年
- 中塚 良「物集女車塚周辺遺跡第8次(7AMAMO地区)～物集女車塚遺跡中央部～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第61集 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2003年
- 松崎俊郎「長岡宮跡第409次(7ANEYT-8地区)～朝堂院南門・朝堂院南面回廊・朝堂院西第4堂、乙訓郡衙跡～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第54集 向日市教育委員会・財団法人向日市埋蔵文化財センター 2002年
- (財)向日市埋蔵文化財センタ『長岡宮「東面北第一門」現地説明会資料』1999年
- 山中 章『長岡京研究序説』塙書房 2001年

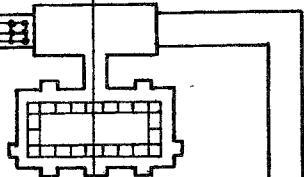


長岡宮城地形面投射分布図 (國下・中塚 2003)

外郭築地



内 裏



大極殿

西第一堂

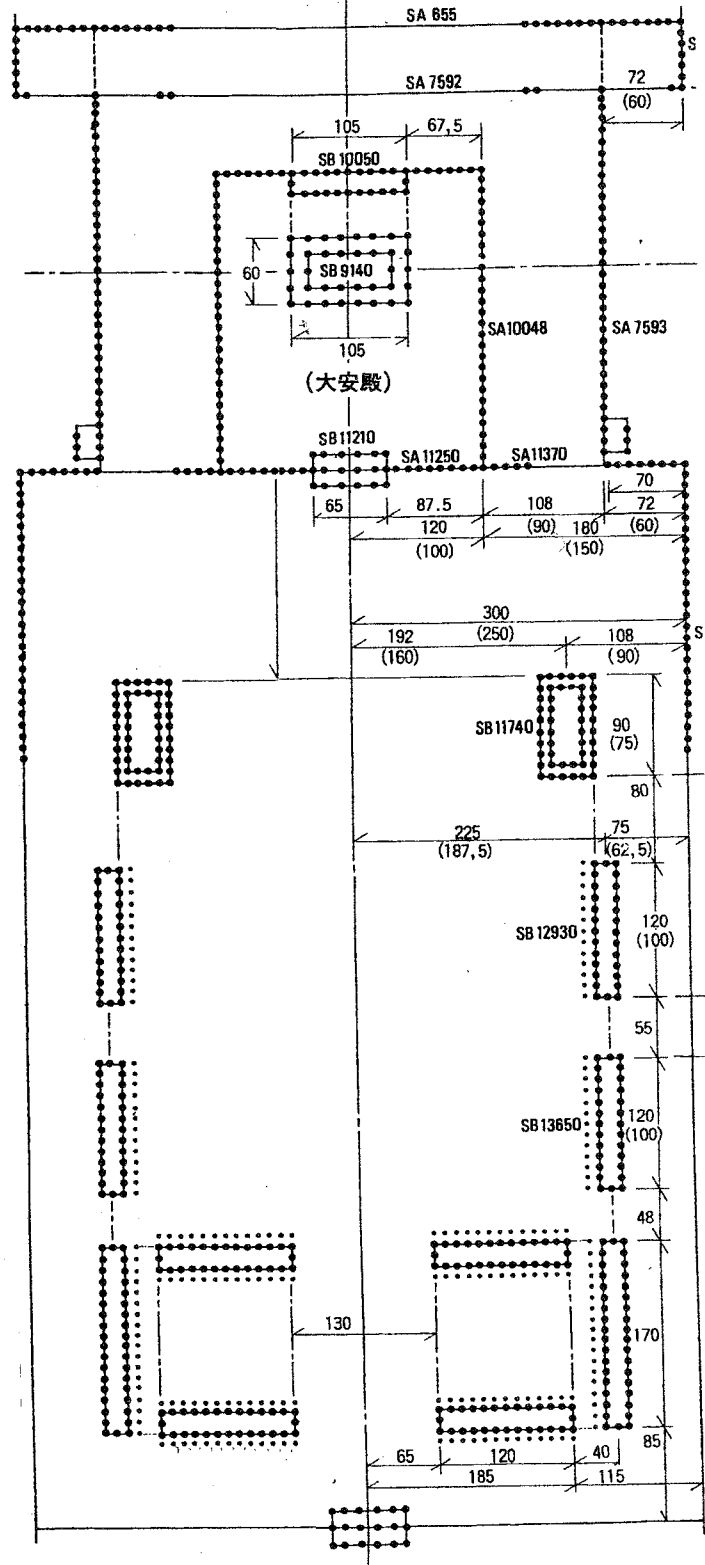
東第四堂

暗渠
溝

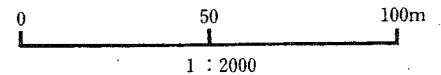
(中外門)

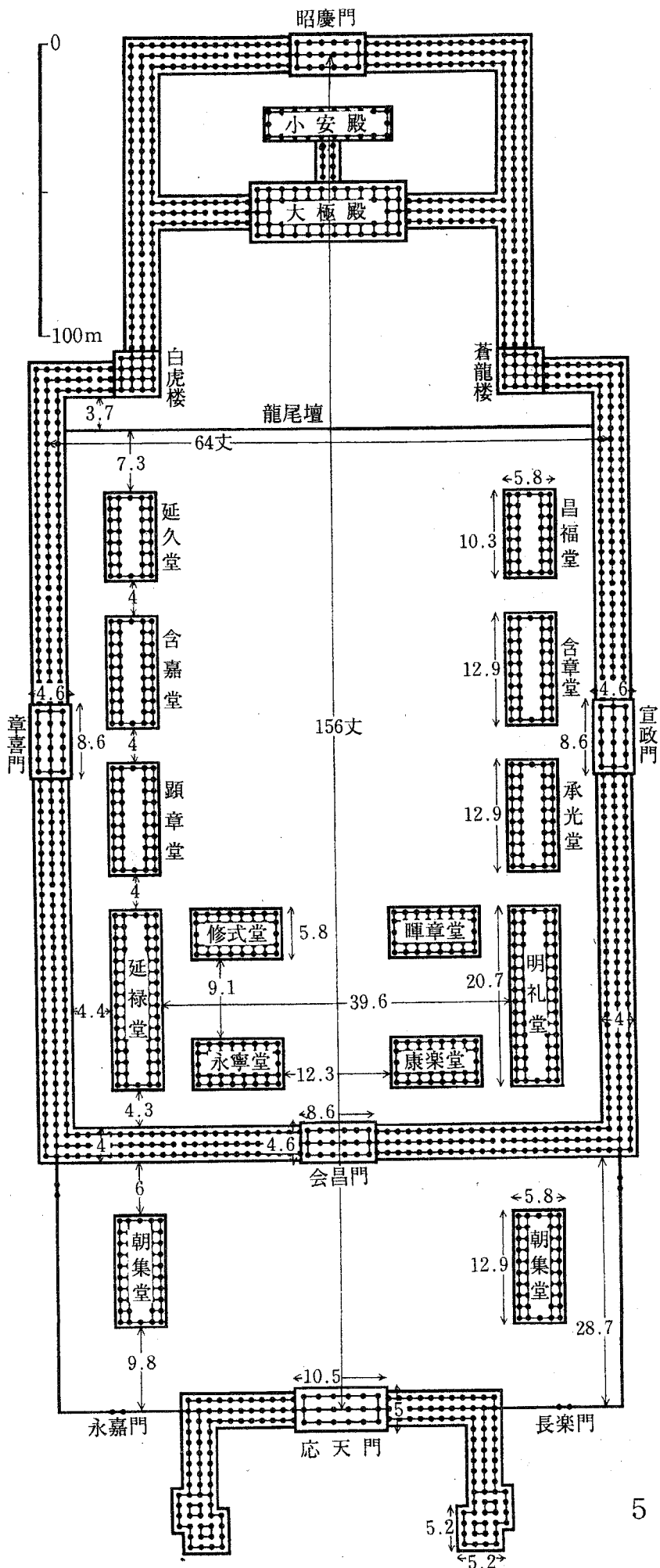
1 後期難波宮

内 C.L. 裏



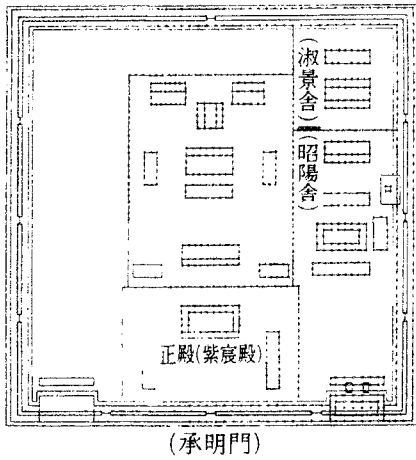
2 平城宮 (奈良時代前半)



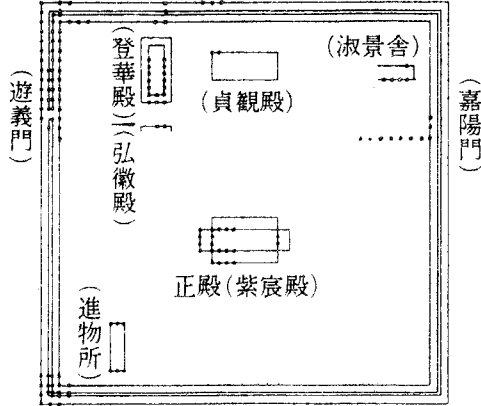


5 平安宮

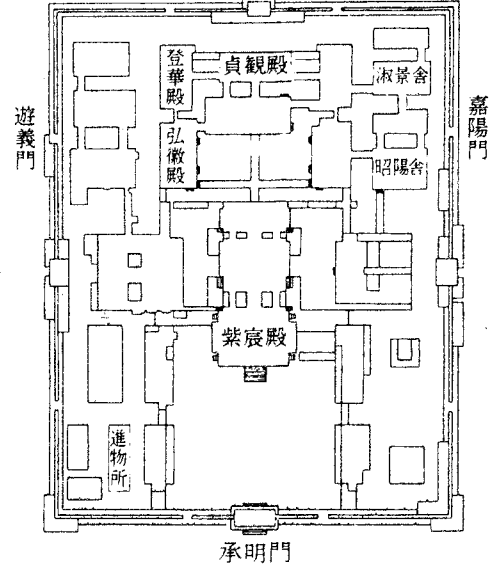
平城宮(VI期:桓武)



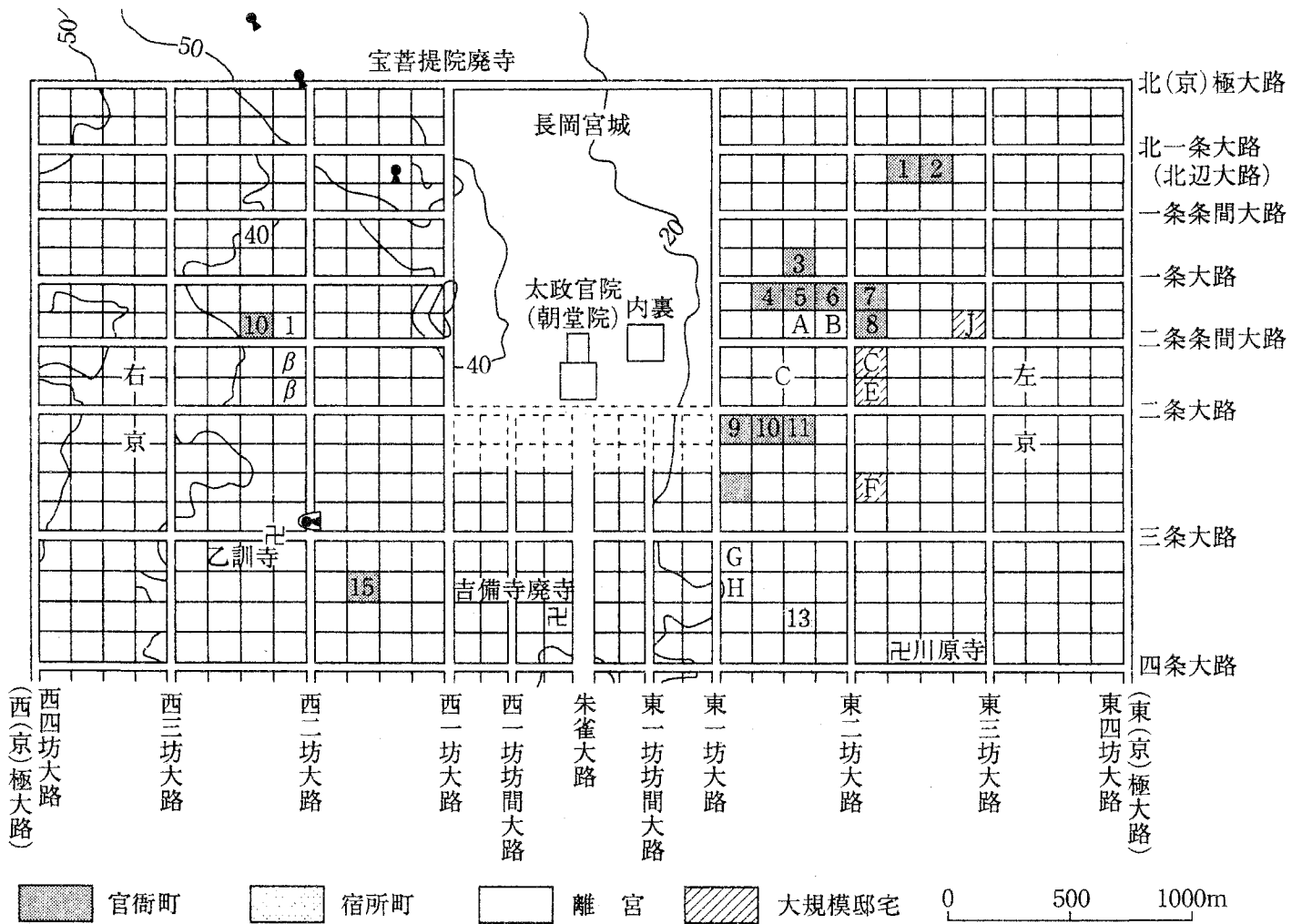
長岡宮(後期:東宮)



平安宮

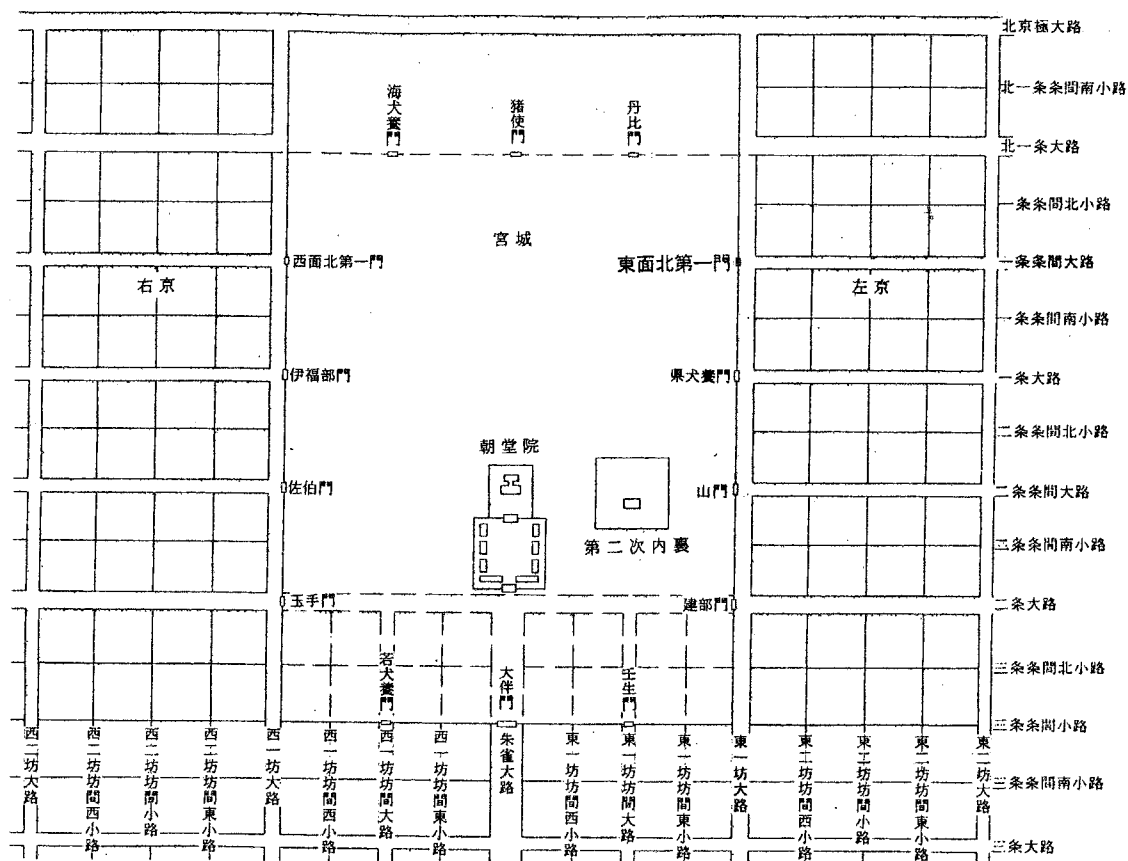


内裏の変遷 (山中 2001)



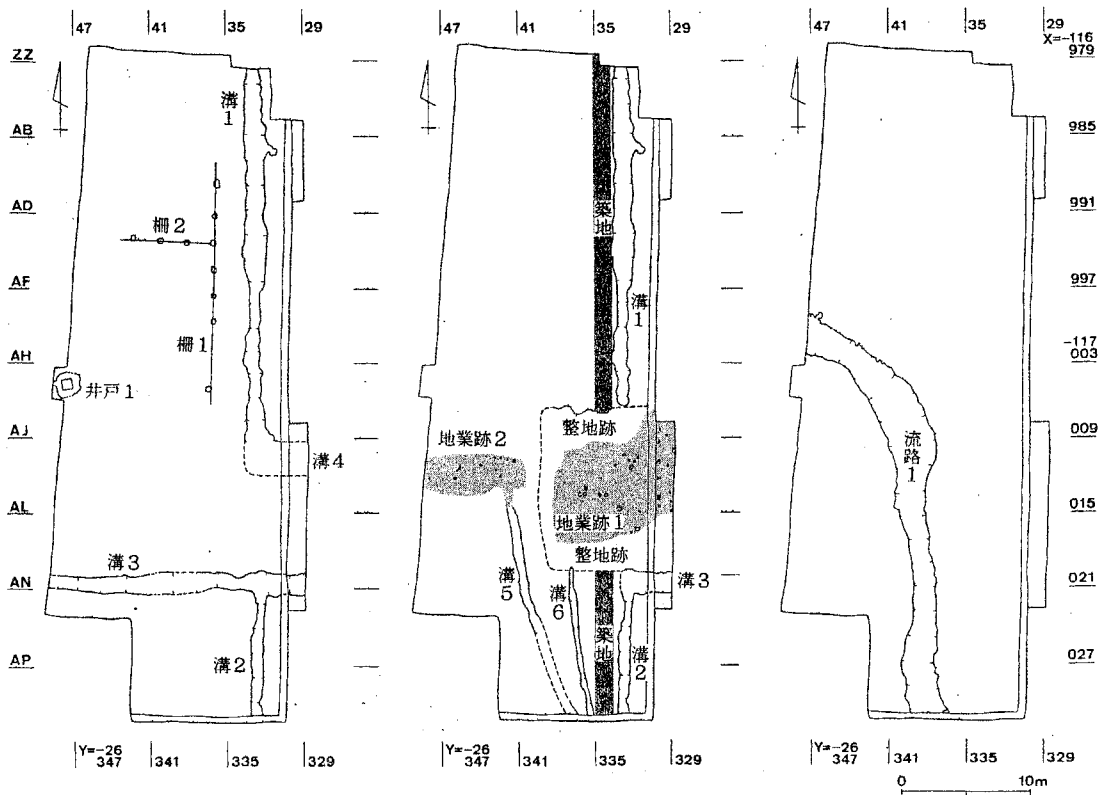
- | | | | | |
|------------------------|-----------------|--------------------|---------|---------|
| 1.2 木材陸揚げ場(港?): 木材進上木簡 | 7 「位田并墾田」木簡 | 12 「厨」墨書土器 | A 東院 | E 某氏邸宅? |
| 3 内膳司所管菜園: 「内膳」墨書土器 | 8 「大炊」墨書土器 | 13 兵士宿所町: 「火」木簡 | B 東院関係 | F 貴族邸宅 |
| 4 金属鑄造工房: 鉄製品鑄造鑄型 | 9 「嶋院」「御門司曹司」木簡 | 14 大舎人寮関係 | C 猪熊院? | G・H 西宮 |
| 5 某政所: 輿部材進上木簡 | 10 太政官厨家 | 15 衛門府関係: 「衛門」墨書土器 | D 車持氏邸宅 | I 某離宮? |
| 6 仏具・調度関係官司(勅旨所?) | 11 造長岡宮使 | a 平城京太政官厨家 | | |
| | | β 平城京「造酒」関係官司 | | |

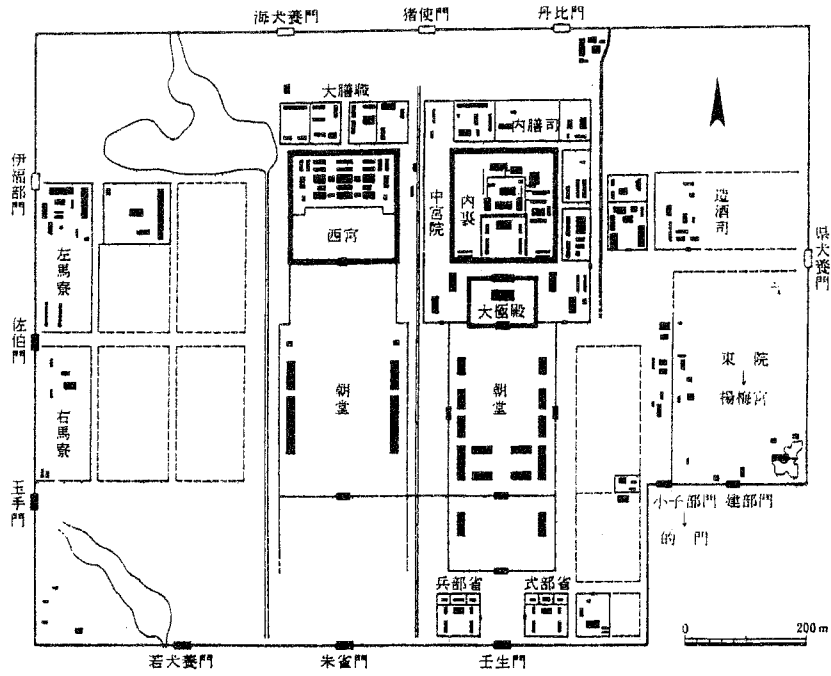
長岡京の官衙町・宿所町 (山中 2001)



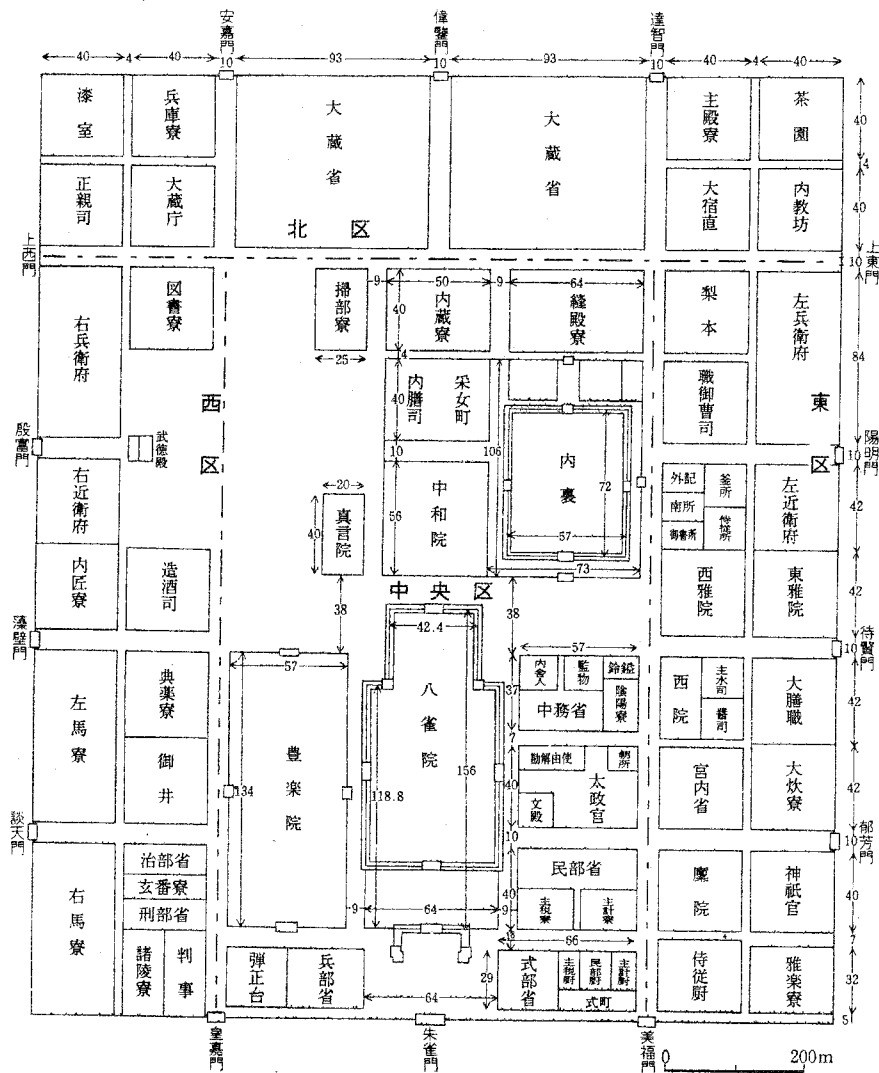
Ⅱ期 (後期造営段階)

Ⅲ期 (廃都直前)

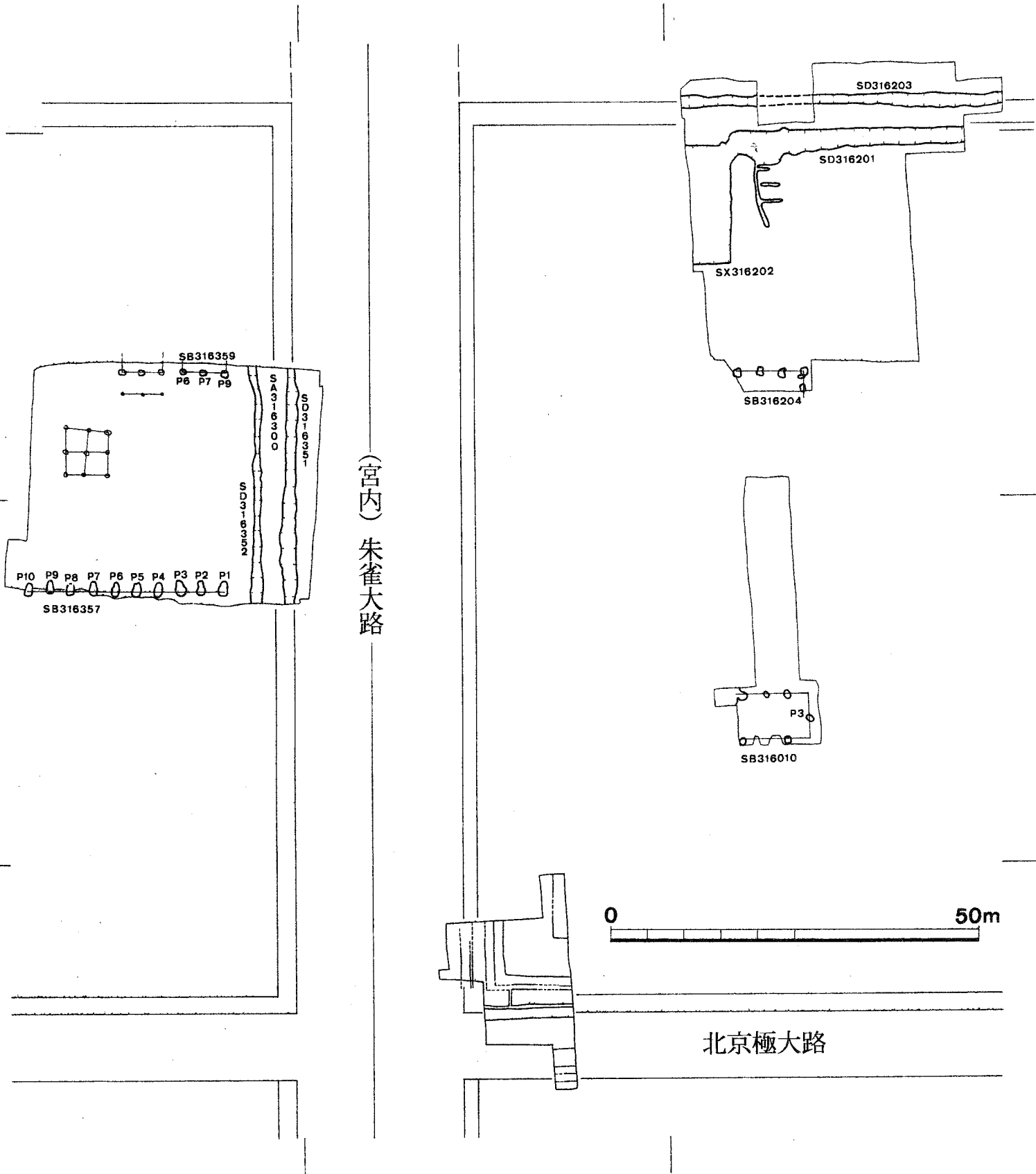




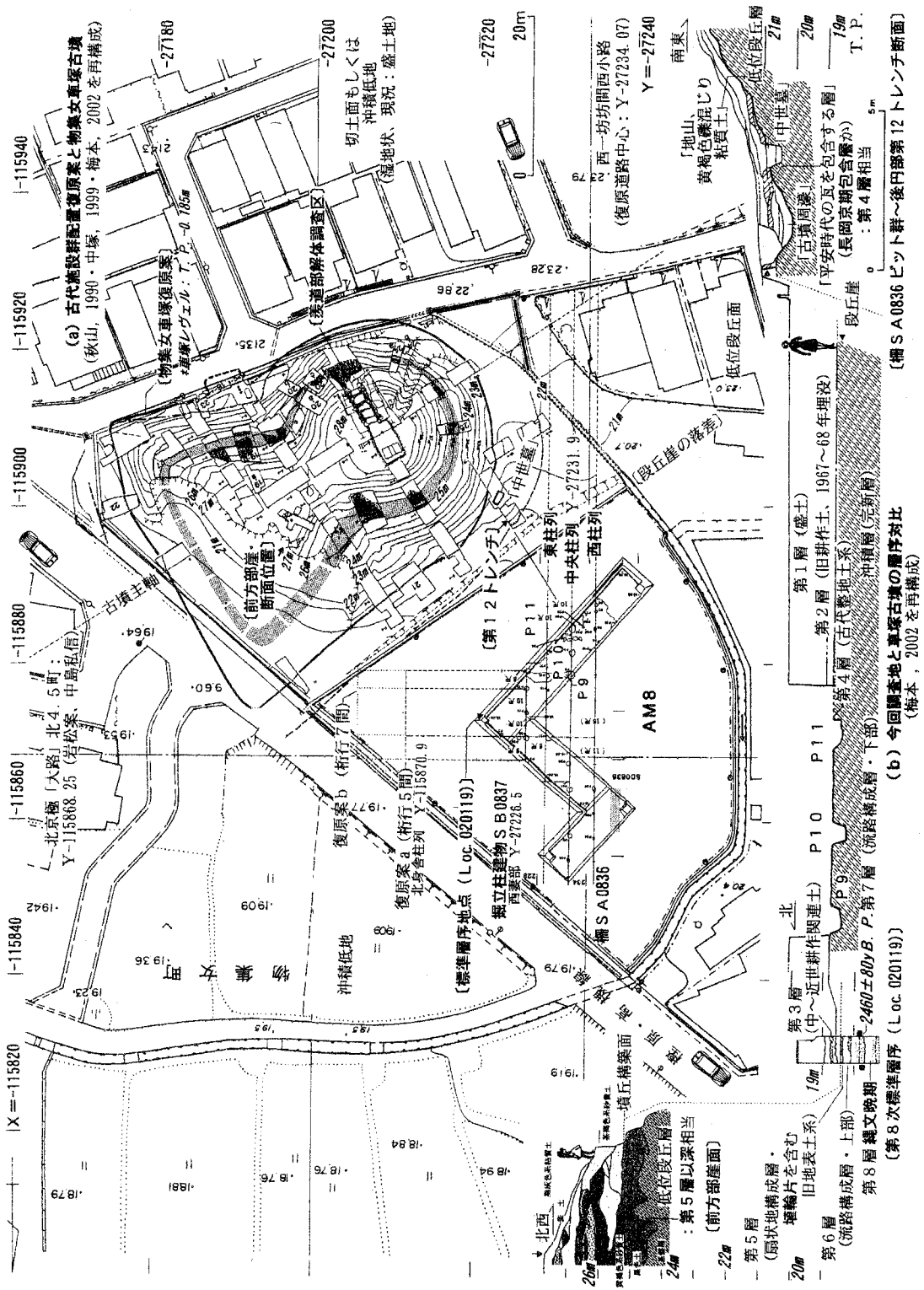
平城宮 (奈良時代後半：小澤 1996)



平安宮 (寺升 1994)



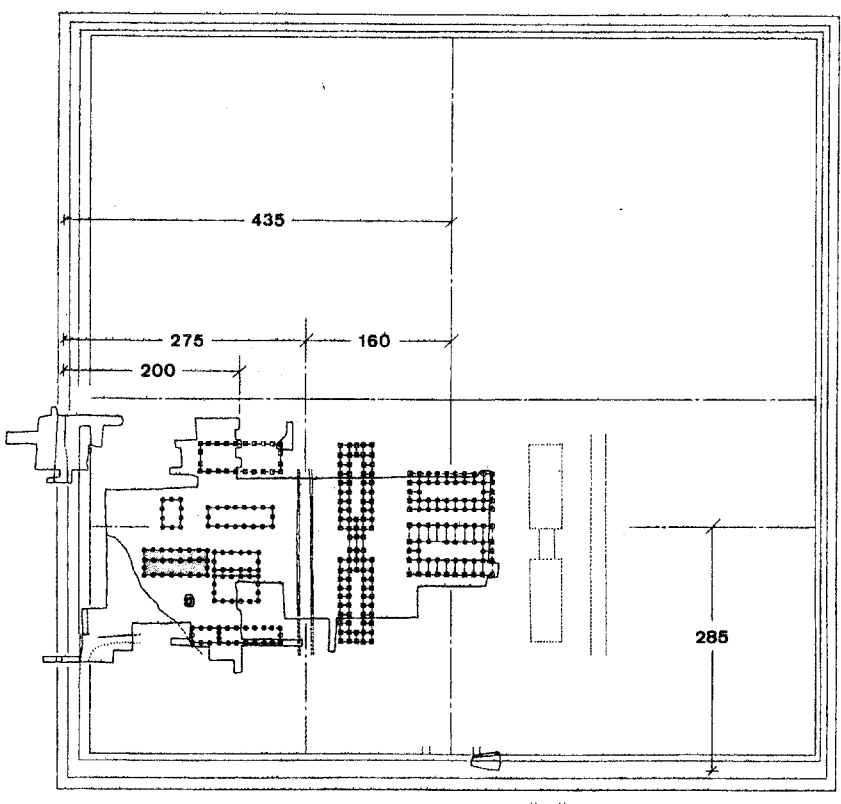
「北苑」の遺構 (梅本他 2005)



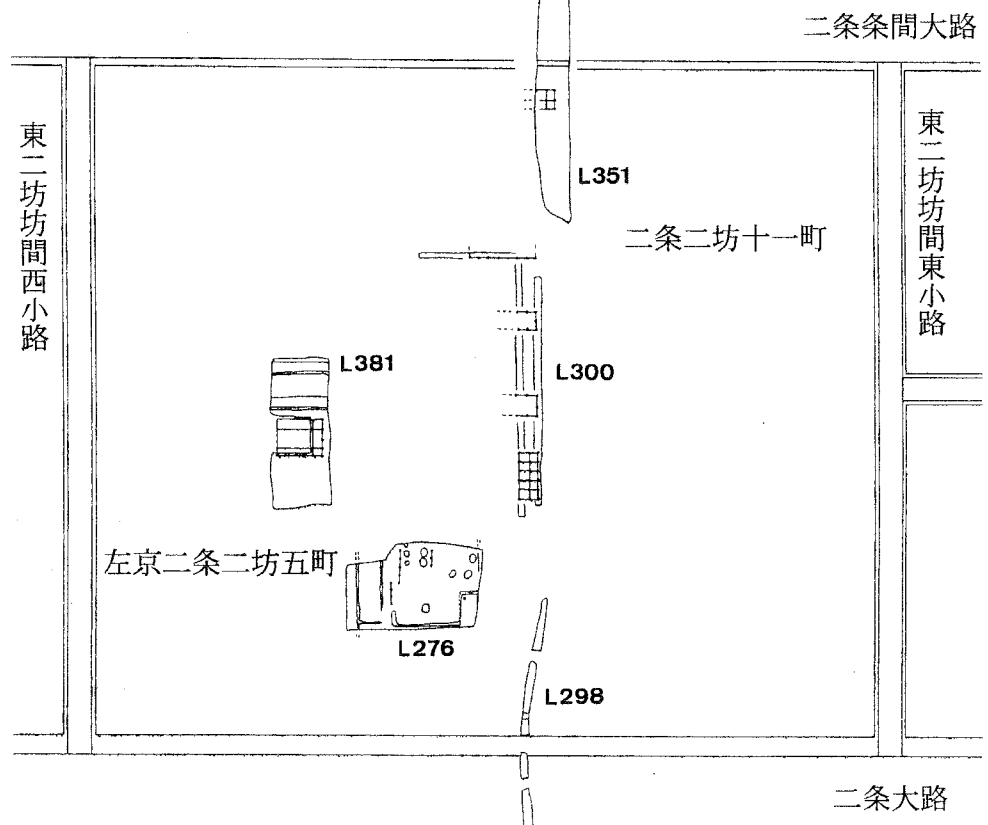
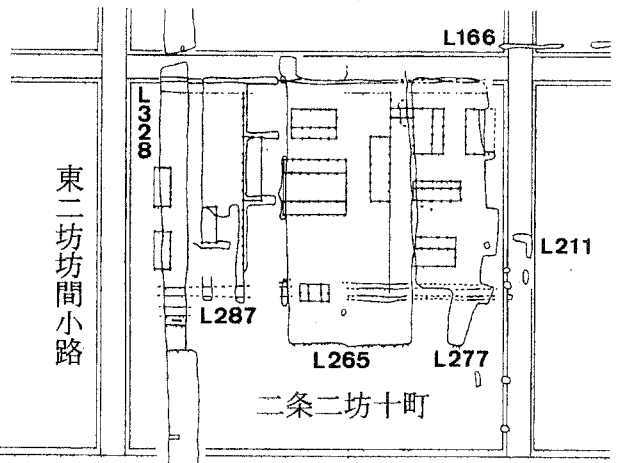
物集女車塚周辺遺跡 (中塚 2003)

(a) 古代施設群配置復原案と物集女車塚古墳 (秋山, 1990・中塚, 1999・梅本, 2002を再構成)

(b) 今回調査地と車塚古墳の層序対比 (梅本, 2002を再構成)



1 東院



2 左京二条二坊十町・左京二条二坊五・六・十一・十二町

長岡京内の離宮 (梅本他 2002・中島 2005)

長岡京の調査成果について

-長岡京右京二条三坊十四町（桂川パーキングエリア）を中心に-

(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
主任調査員 岩松 保

1. 平城京廢都と長岡京遷都
 - ・ 前期造営と後期造営

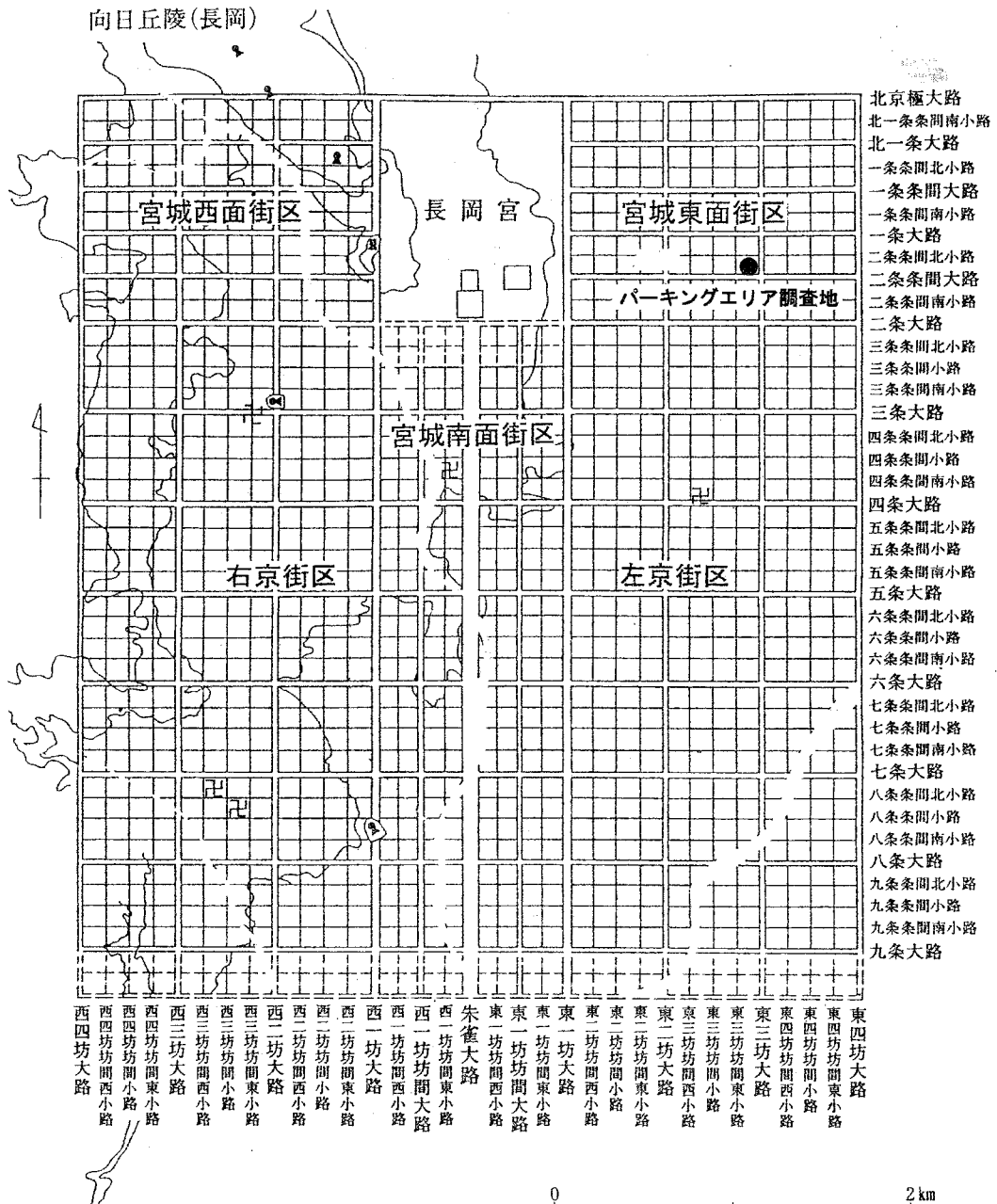
2. 条坊路の様相
 - ・ 東三坊大路
 - ・ 二条条間大路

3. 右京二条三坊十四町の様相
 - ・ 一町四方の宅地
 - ・ 大路に門を開く
 - ・ 整然とした配置 2間×5間の建物
 - ・ 高官の屋敷？

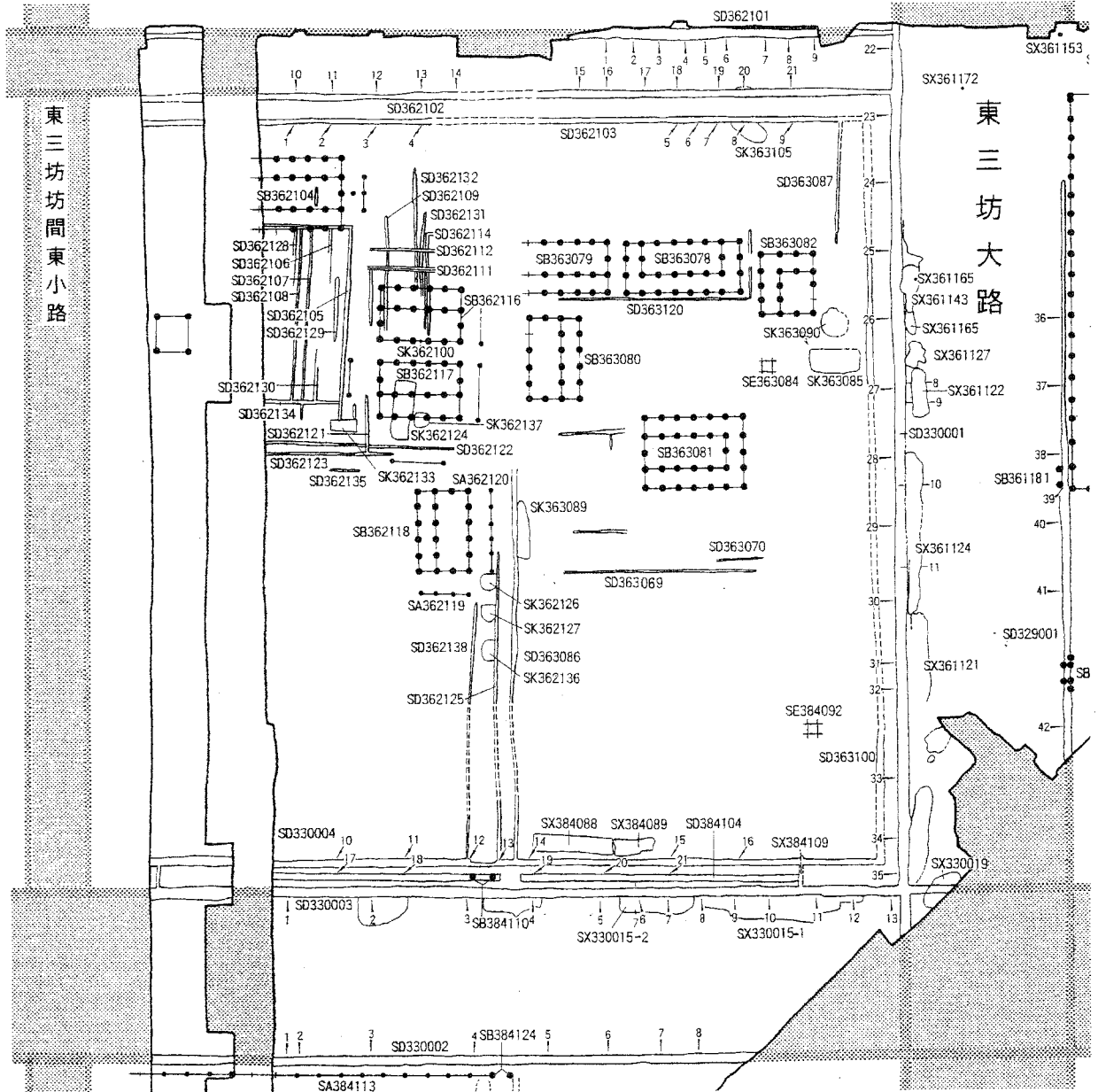
4. まとめ
 - ・ 長岡京の条坊計画
 - ・ 長岡京の整備

表 1 長岡京略史

782年	(延暦元)	4月11日	(平城京) 造宮省廃止
783年	(延暦2)	3月12日	和氣清麻呂を摂津太夫に任命
784年	(延暦3)	5月7日	難波のガマ2万匹の行進
		5月16日	山城国乙訓郡長岡村を遷都のための視察をする
		6月10日	造長岡宮使任命。都城・宮殿の造営を開始する
		6月28日	新宮内に私宅の入る百姓に正税4万3000束を賜う
		11月11日	桓武天皇が長岡宮に移幸(長岡遷都)
785年	(延暦4)	1月1日	大極殿で元旦朝賀、内裏で節日饗宴
		9月23日	造長岡宮使藤原種継暗殺
		10月	早良皇太子を廃し、餓死せしめる
787年	(延暦6)	10月8日	水陸の便を以て都を遷す
788年	(延暦7)		(大和国はこの年を遷都の年とする『日本三代実録』864年)
791年	(延暦10)	9月16日	平城京諸門を長岡宮に移建
792年	(延暦11)	8月9日	大雨洪水で桂川・小畑川などが溢れる
793年	(延暦12)	1月15日	葛野郡宇多村を遷都のために視察
		1月21日	宮を壊すため(長岡京)東院に遷御
794年	(延暦13)	10月22日	新京に遷る(平安京遷都)



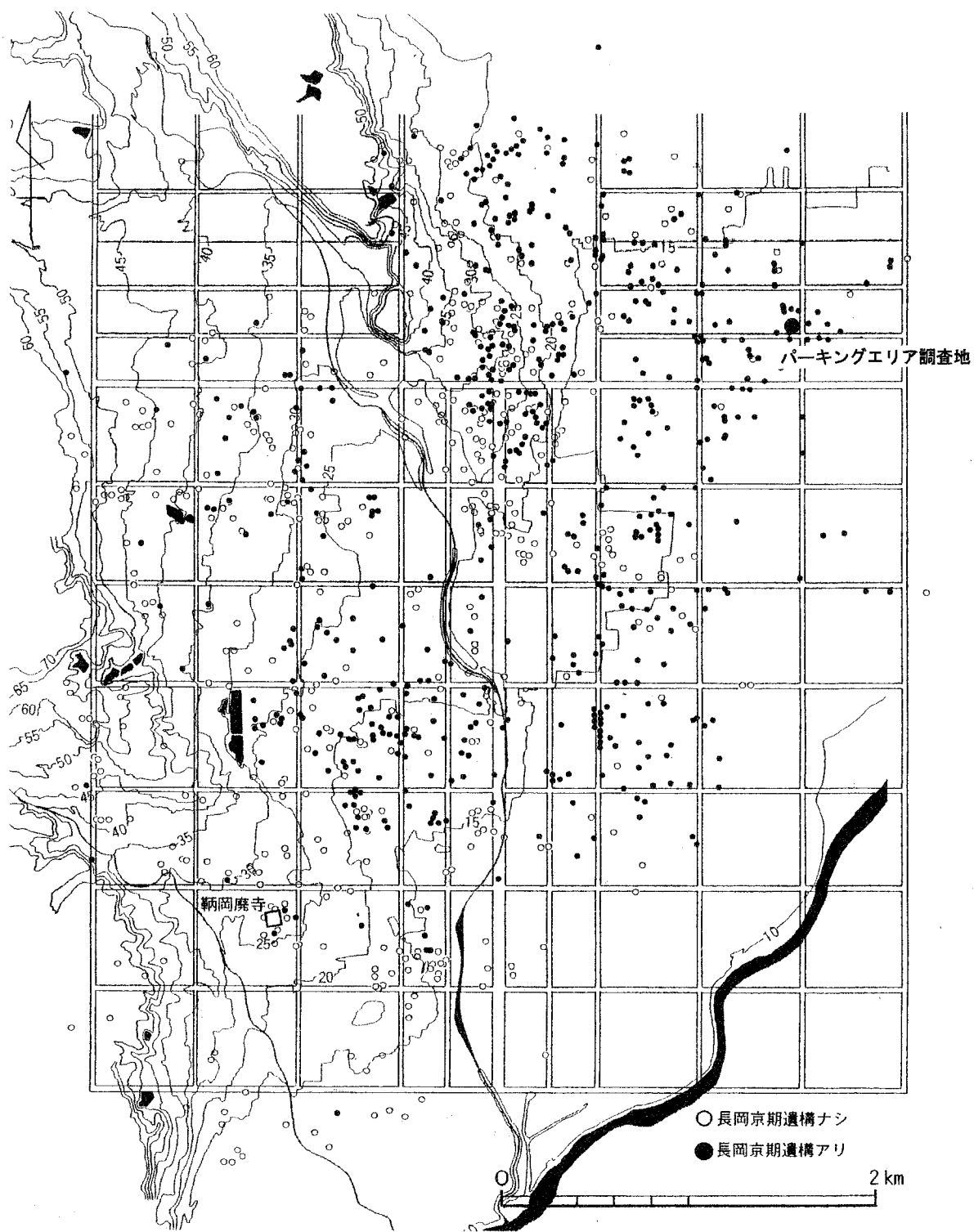
第1図 調査地位置図



第3図 左京二条三坊十五町の遺構

表2 左京二条三坊十五町 二間×五間の建物

町	建 物	規 模				廂	
		梁間	柱間 (尺)	桁行	柱間 (尺)	位置	出幅 (尺)
二条三坊十五町	SB362104	2	8	(4)	8	北・南	9.5
	SB362116	2	8	5	8	北	10
	SB362117	2	8	5	8	南	11
	SB362118	2	8	5	8	西	9.5
	SB363078	2	8	5	8	東・西・南	9
	SB363079	2	8	(4)	8	南	9
	SB363080	2	8	5	8	東	9
	SB363081	2	8	5	8	北・南・東	9
	SB363082	2	8.5	3	7	北・西	9
京都市埋文研	1		(1)				
二条四坊二町	SB336001	2	8	5	7.5		
	SB336002	2	8	5	7.5		
	SB336005	2	8.5	5	7	東・西・南	8・9
	SB303101	2	8~8.5	(3)	8~8.5	東・西	9
	SB303102	(2)	7~9.5	(3)	7~9.5		
	SB329002	(1)	6	(1)	6		
	SB329004	1	14	(3)	6		
	SB336003	2	8.5	7	9		
SB336004	2	11	2	8			
SB329005	1	16	(4)	8~9			



第6図 長岡京期の遺構分布

平安京の調査成果について

(財)京都市埋蔵文化財研究所
主 任 網 伸也

1. はじめに

平安京は桓武天皇によって794年(延暦13)10月に遷都された最後の古代都城です。京域は東西約4.5km、南北約5.2kmで、南辺中央の羅城門から幅約84mの朱雀大路が南北に通リ、北辺中央に宮が造営されました。遷都前年の正月に山背国葛野郡宇太村の地を視察させるとともに長岡宮解体のため内裏から東院に移っており、以後多くの造営の記録が確認できます。遷都後も引き続き大規模な造営工事が進められましたが、805年(延暦24)には徳政の相論により造宮職が廃されており、この時期には造営はほぼ一段落したと考えられます。ここでは、平安宮と京の発掘調査事例をみながら、宮の構造や寝殿造り邸宅などについて考えてみます。

2. 平安宮

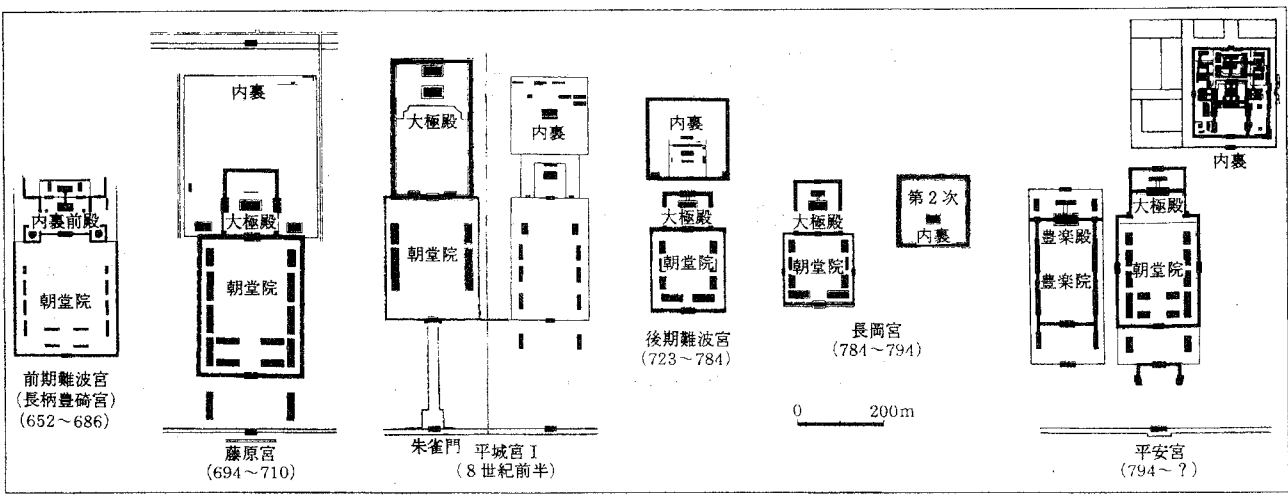
平安宮の規模は東西約1.15km、南北約1.38kmの縦長の長方形で、平城宮のような張り出し部はもちません。朱雀門を入ると正面が朝堂院です。朝堂院はもともと朝政の場として二官八省の官人たちが実際に執務を行う場所でした。しかし、律令体制の整備とともに政務が複雑化し、実質的な政務は朝堂院の周囲に配された曹司(役所)で執り行われるようになります。そして、朝堂院は儀式の場として重視されるようになり、西隣には新たに宴の場として豊楽院が作られます。このような行政システムの変化が、宮の構造によく現れています。

3. 平安京

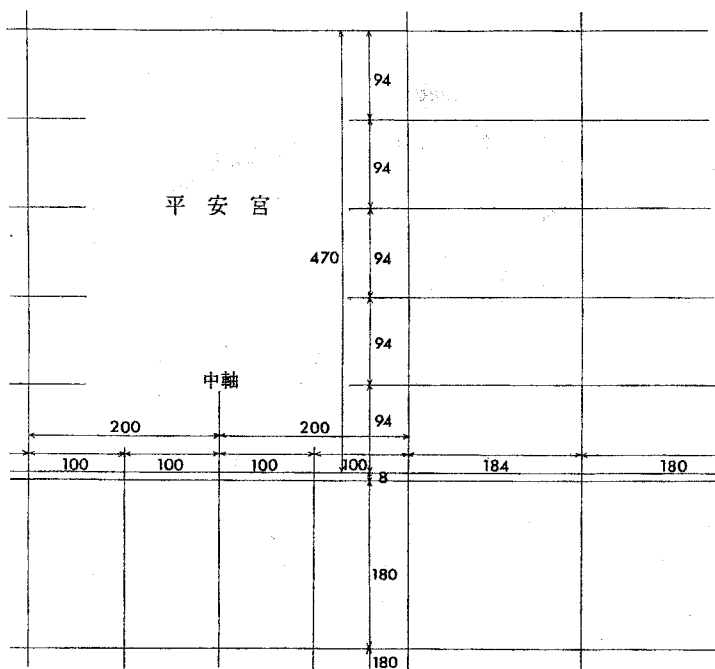
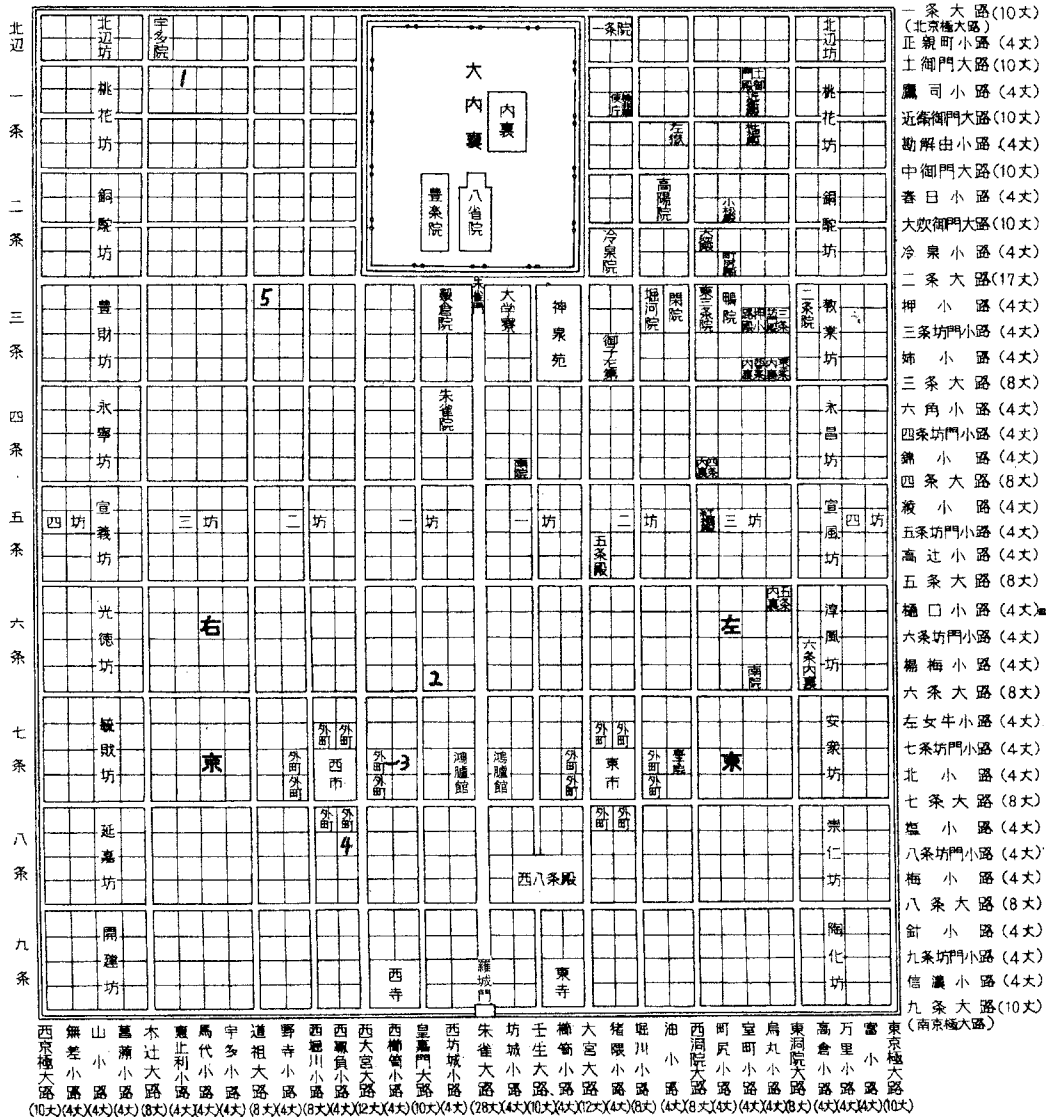
平安京条坊の構造については、『延喜式』左右京職式京程条に詳しく記載されています。それによると、築地心を基準として各大路小路の路面幅・築地幅・側溝の位置と幅などが細かく規定されており、京内の町の大きさはすべて400尺(約120m)四方に統一されています。平安京の造営に際しては、精度の高い測量技術を駆使して京内全体の計画プランがまず作成され、それを元に条坊が設定されていたことが判明してきました。しかし、実態としては宅地班給が初めから京内全域に行なわれたわけではありません。また、10世紀後半には主要な離宮や貴族の邸第が左京に集中していたため、左京の市街地化が進行していきます。ただ右京域でも、排水システムを維持するために路面が河川に変化していきますが、条坊地割は厳格に維持されていました。ところで、平安時代の貴族邸宅としては、10世紀中頃に平安京で完成した「寝殿造り」が有名です。その構造は主屋(寝殿)の東西に対とよばれる副屋を設け、その間を透渡殿と呼ばれる廊下で結んで対の南には中門廊を延ばし、寝殿の南には池を掘って中島・橋・釣殿・泉殿などを設けるのが典型的と考えられています。しかし、実際の発掘調査では典型的な「寝殿造り」はいまだに発見されていません。今後は、発掘調査の成果をもとに「寝殿造り」とは何だったのか検証していく必要があります。



平安宮推定復元図 (梶川敏夫作画)

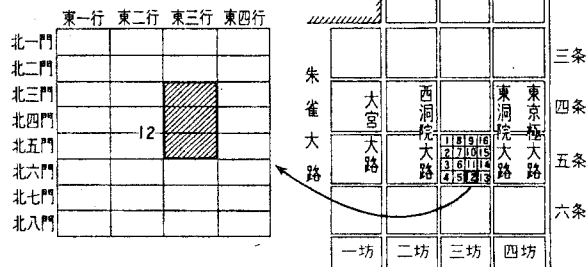
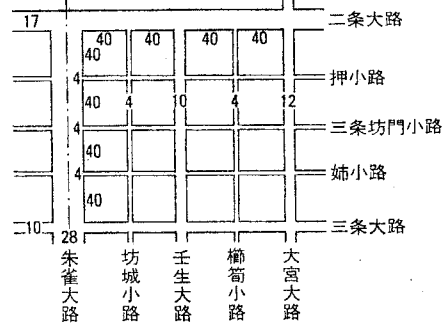


内裏・朝堂院の変遷 (町田章作図『古代の宮殿と寺院 古代史復元8』講談社 1989) を一部改変

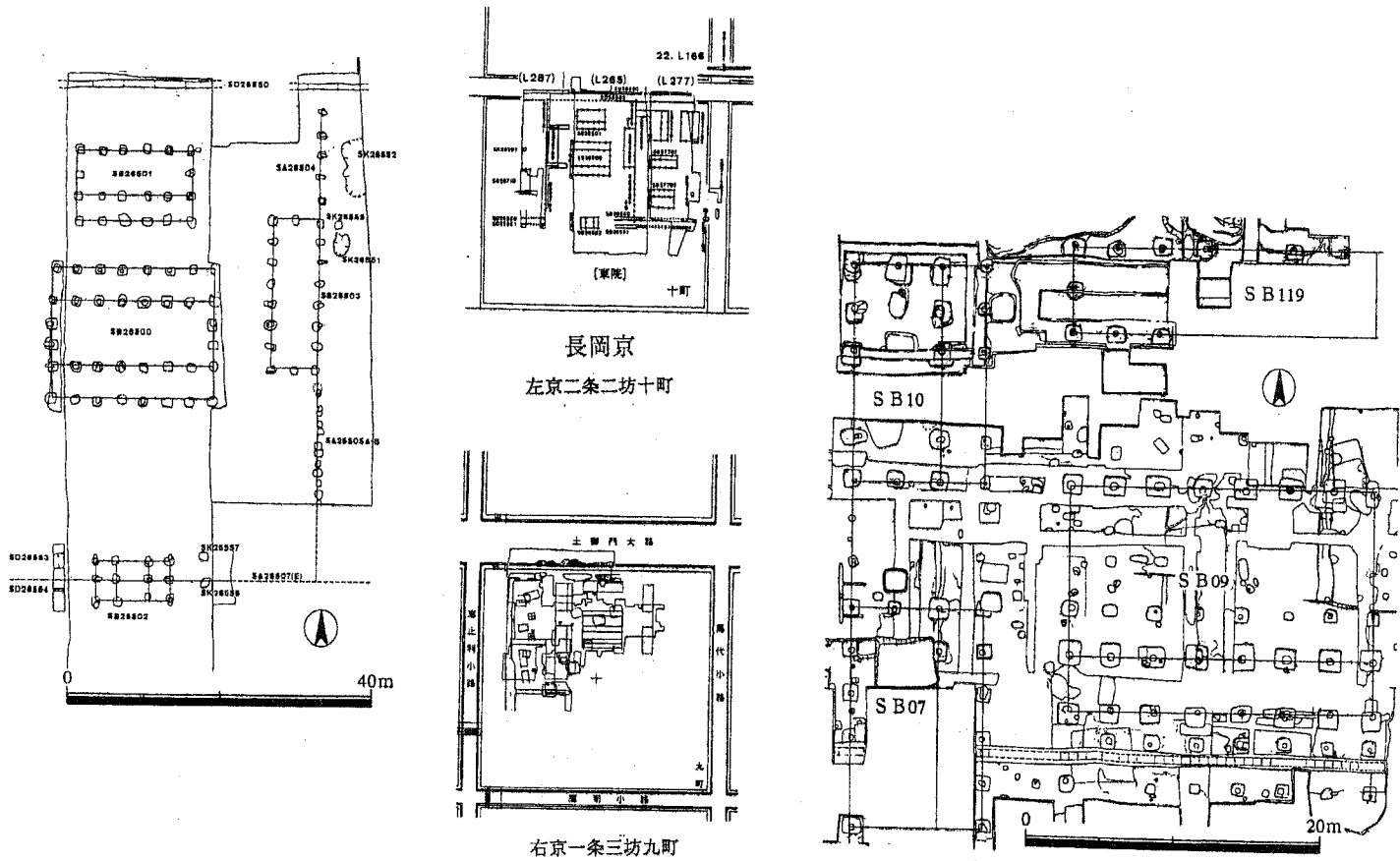


平安京造営計画線の復原 (数値単位は丈を示す)

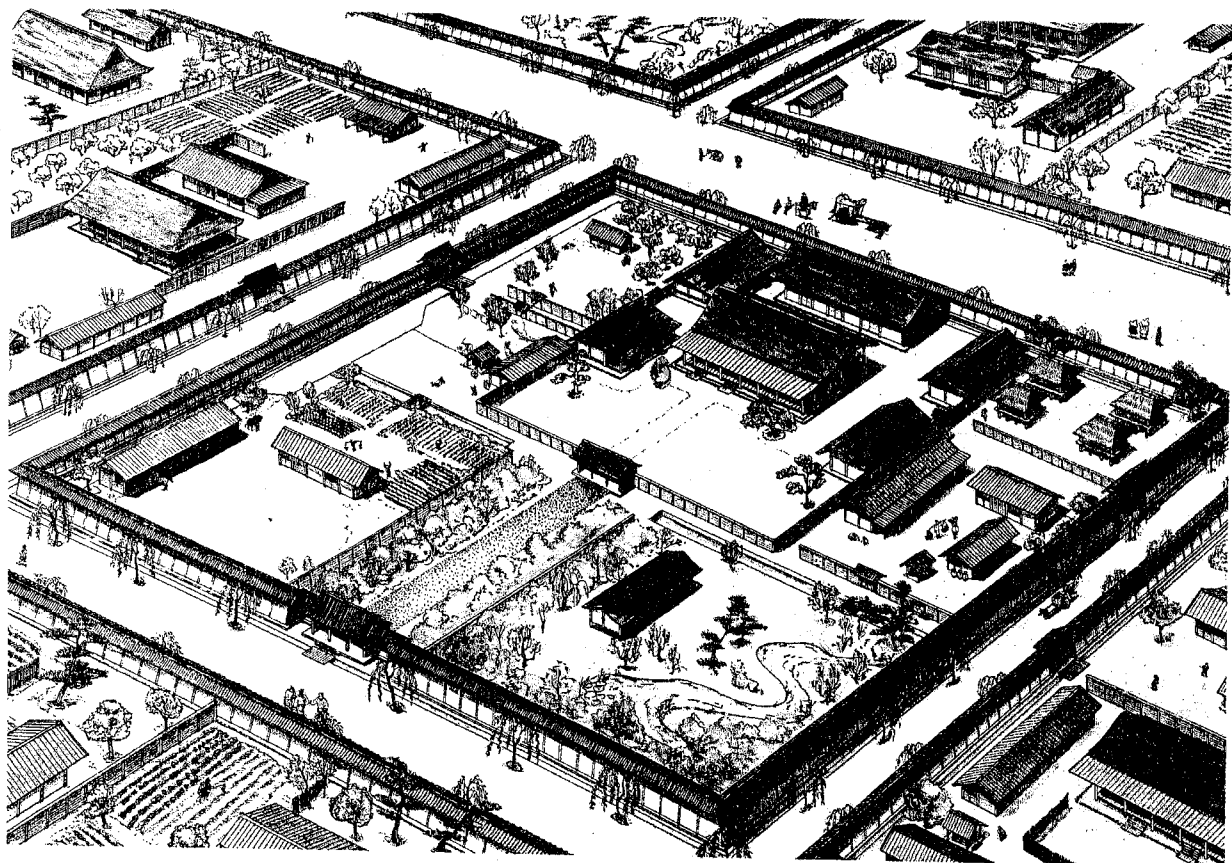
平安京



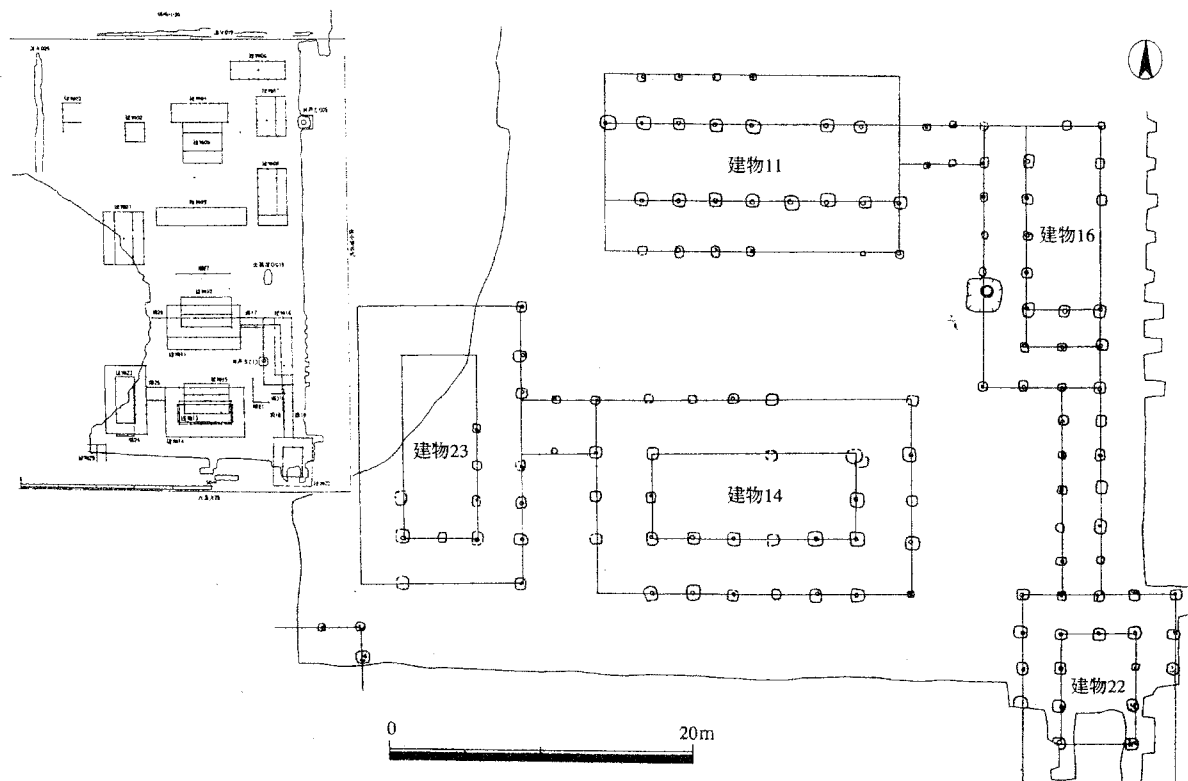
平安京の地割一その二 左京五条三坊十二町東三行三四五門の地を例示した



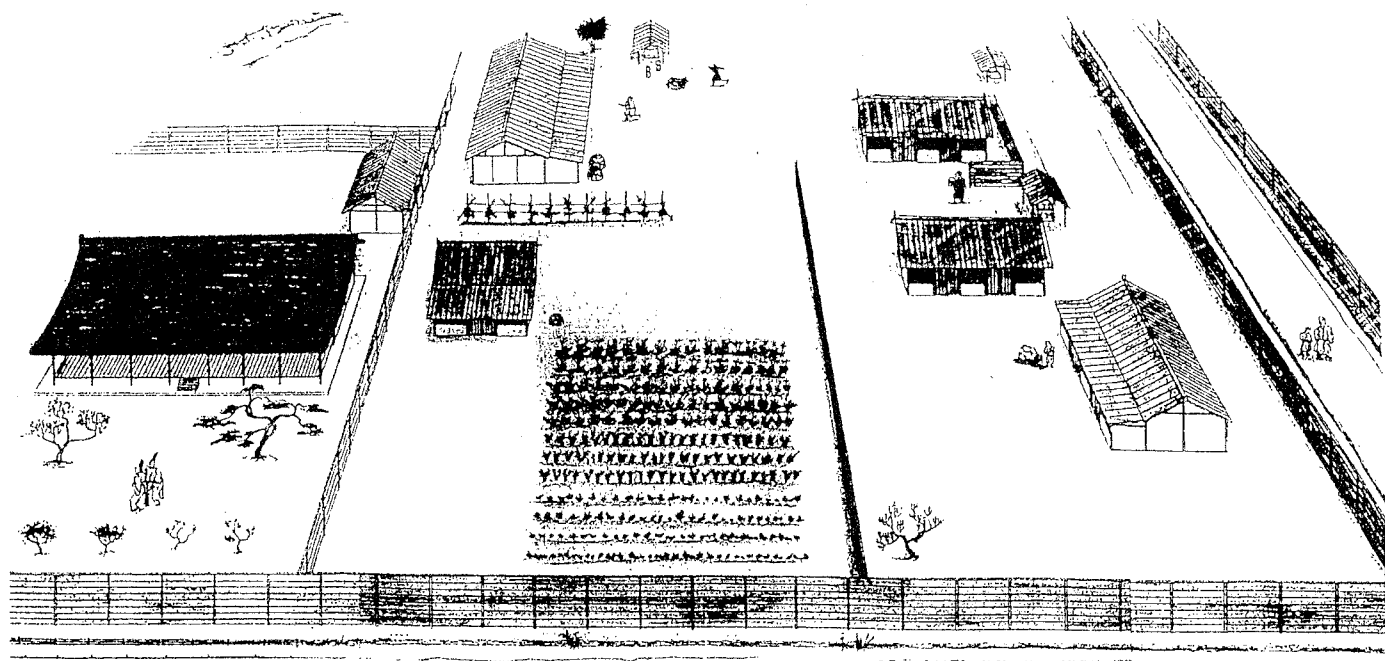
長岡京左京二条二坊十町邸宅と平安京右京一条三坊九町邸宅



60 右京一条三坊九町復元図 平城京の1町規模の住宅と共通する傾向の建築配置であり、七間二面庇の正殿を中心に、脇殿や後殿を左右対称にコの字型に並べている。中心建物群の西や南には付属建物、井戸・橋・溝が見つかっている。



平安京右京六条一坊五町建物配置図



平安京右京七条一坊十四町の様子（9世紀初頃）

この絵は、発掘調査によって確認した建物遺構を参考にして復元したものです。

平安京は、大路・小路によって区画された一辺約120mの正方形（町）を基本単位として構成されています。その一町を東西4分割（行）・南北8分割（門）にすることを四行八門制と言います。1/3 2町を一戸主（約450㎡・約136坪）とよび、これが宅地の最小単位となります。

宅地の規模は、身分によって違います。貴族は、三位以上（一町以下）、四～五位（1/2町）、六位以下（1/4町以下）と規定されています。

この調査区では、二戸主以上の小規模宅地として利用されており、六位以下の下級官人の住居であったと考えられます。

頼通邸高陽院の礎石建物

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

藤原頼通の邸宅として著名な高陽院は平安京左京二条二坊九・十・十五・十六町の2町四方を占める大邸宅で、寛仁三年(1019)に新造され、治安元年(1021)に落成しました。以後、11世紀から12世紀初頭にかけて幾たびかの罹災と再建を繰り返しますが、天皇の里内裏としてたびたび利用されるなど、平安時代後期を代表する邸宅で、『駒競行幸絵巻』などに描かれた華麗な情景はつとに有名です。

平安時代後期の邸宅は、「寝殿造」としてその配置が復元されていますが、高陽院についてはよくわかりません。『栄花物語』に記された「こまくらべの行幸」での高陽院の情景は、

高陽院殿の有様、この世のことと見えず。海龍王の家などこそ、四季は

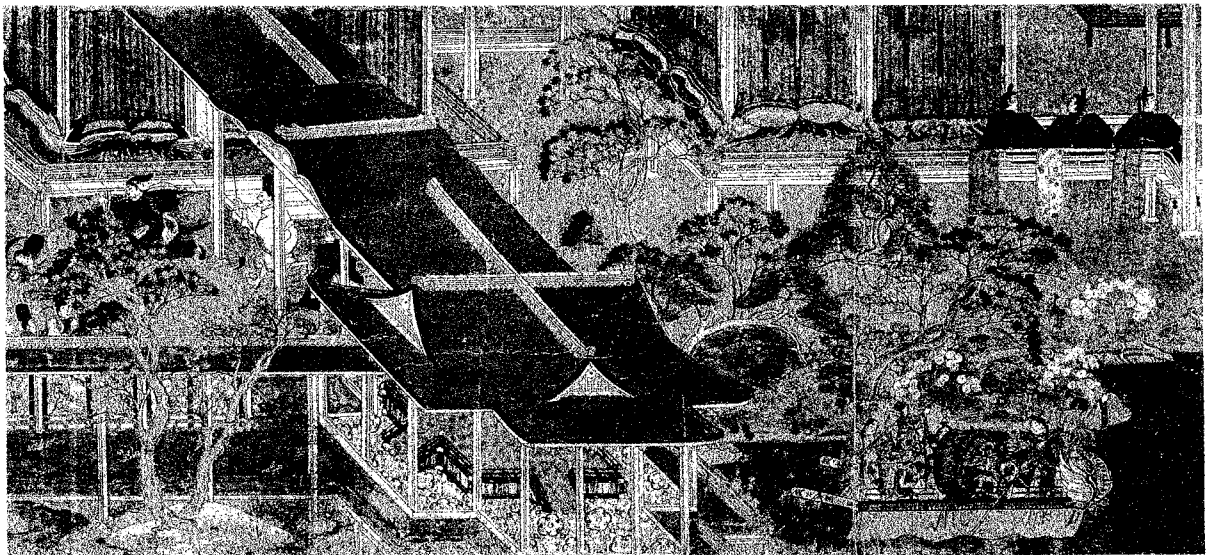
四方に見ゆれ。この殿はそれに劣らぬ様なり。例の人の家造などにも違ひたり。寢殿の北・南・西・東などには皆池あり。中島に釣殿たてさせ給へり。

とあるように、一般の邸宅とは様相が異なり園池が寢殿の四方に配されていたことがわかります。

過去の発掘調査でも、高陽院は「海龍王の家」にふさわしい広大な園池をもっていたことが判明しています。九町の調査で華麗な洲浜を、十町の調査で園池の西岸汀を、十五町の調査で中島あるいは出島と考えられる遺構を検出しており、池底の標高からこれらが同一の池(園池1)であることが推定できました。また、十六町の調査では園池の東岸洲浜を発見しましたが、先の園池よりも池底は最大で0.8m高く、独立した池(園池

2)であることが判明しました。これらの調査成果から、高陽院は敷地の南西よりに少なくとも1町ほどの規模を持つ広大な園池1があり、北東の独立した園池2から遺水などで南西の園池1に水が流れ落ちていた様子が推定できます。ただ、建物跡は発見できず、一般の「寝殿造」とは異なるという建物配置についてはまったく不明でした。

ところが、1997年4月に行なった発掘調査において、初めて建物跡の一郭を発見することができたのです。発見した建物遺構は、頼通時代の建物北西部と東西廊の一部で、特に建物北西隅には礎石と雨落ち溝が残っていました。この礎石は長径0.9mほどの砂岩で、泉南から和歌山の海岸に分布する和泉砂岩という石です。高陽院を



『駒競行幸絵巻』 和泉市久保惣記念美術館蔵

造営する際に海岸から趣のある石を選び込み、礎石としてとして用いたと考えられ、「海龍王の家」と例えられた邸宅の様子をうかがうことができます。建物の性格はわかりませんが、南北棟である可能性が高いこと、西に東西廊が付属しており侍廊と考えられることなどから、寝殿の西対あるいはそれに準ずる建物と推定できます。

『駒競行幸絵巻』によると、西対の東には渡廊でつながれた寝殿があり、南には中門廊と釣殿がみえます。ここで問題となるのは、寝殿との関係です。今回発見した礎石建物跡の東で、園池北岸の華麗な洲浜を発見しています。寝殿はこの洲浜の北側に推定できますが、検出した建物は園池洲浜のすぐ西で、寝殿の南西に位置することになります。寝殿と渡廊でつながるには一度北に上がって東に曲がらなければならず、今回検出した建物の北側にもう1棟建物があることも想定できそうです。

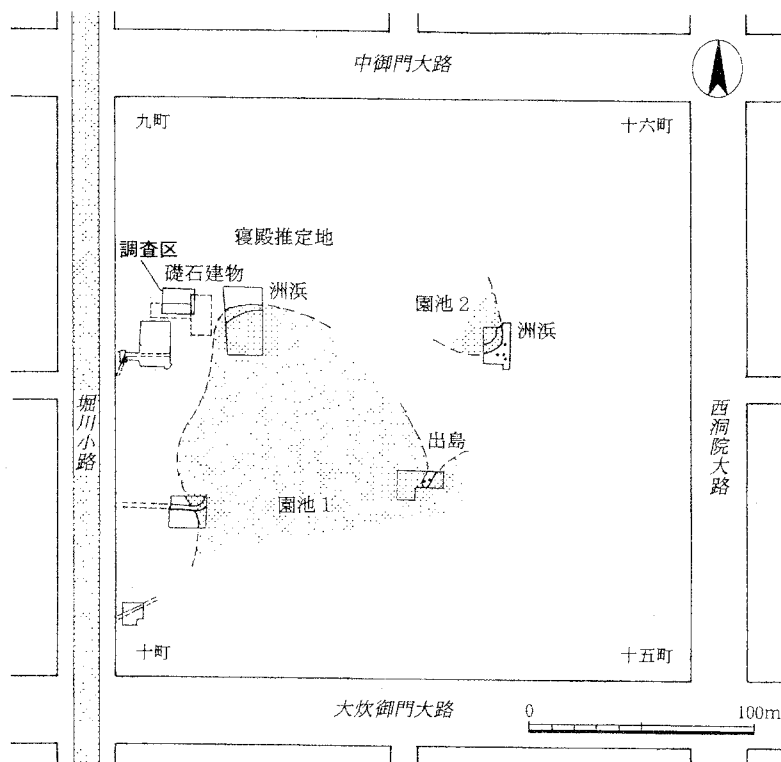
また、礎石建物は頼通時代よりも前に造られた園池を埋め立てて造成していることが判明しまし

た。高陽院はもともと桓武天皇の皇子である賀陽親王の邸宅として営まれ、東西1町・南北2町の敷地でした。『日本紀略』延喜五年(905)9月に高陽院の失火の記載がみられ、頼通伝領直前の『御堂関白記』寛弘元年(1004)12月条にも失火記載が認められることから、9世紀から10世紀を通じて皇室あるいは上級貴族に伝領されていたと考えられます。10世紀以前

の高陽院にも園池洲浜が確認され頼通はこの園池を踏襲して高陽院を新造したことが推定できます。

高陽院は平安京左京の中で、最も遺存状況が良好な地域であることが今回の調査でも裏付けられました。今後も継続して発掘調査を行ない、絵巻物の中でしかわからなかった高陽院の構造を明らかにしていく必要があるでしょう。

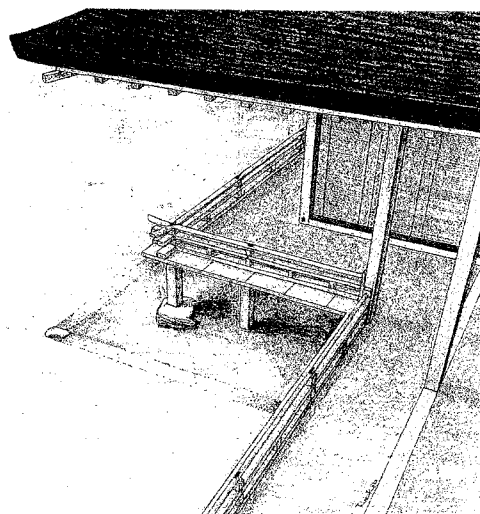
(網 伸也)



頼通時代の高陽院跡 遺構配置図



礎石建物跡 写真中央の白い石が和泉砂岩(南西から)



礎石建物と東西廊 復元図

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナーなどは、下記のホームページでもご案内しています。

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3

Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189